L337

虞美人

來城小隱著

8
53

國色史叢序

内閣文庫

冠す、四章

楚臺の酬褒、周室の狼烽、城を傾け、國を亡すものは西施と褒姒に非ず耶、個の輕盈も亦社稷の存亡に關す、後世如何ぞ古美人の傳記なかるべけん耶、此れ余が茲に此稿を起す所以、亦所謂る小題大做、大方の君子幸に雙眼を豁開し、認めて一部遊戯の文章となすこと勿れ、

題して國色史叢といふ、史に正史あり、稗史あり、兒女の鍾情、賓客の解嘲に於て多少の點梁を加ふるも亦何の妨あらん耶、

徐秋濤の美人の譜を作るや、古來淑媛名妓の美人の目に當るに足るもの三十五人を擇ぶ、曰く西施、曰く毛嬙、曰く夷光、曰く李夫人、曰く卓文君、曰く班婕妤、曰く王昭君、曰く趙飛燕、曰く合德、曰く蔡琰、曰く二喬、曰く綠珠、曰く碧玉、曰く張麗華、曰く侯夫人、曰く楊太眞、曰く崔鸚鵡、曰く開盼盼、曰く蘇蕙、曰く非煙、曰く柳姬、曰く霍小玉、曰く貞娘、曰く花蕊夫人、曰く朱淑眞、曰く紅拂、曰く李娃、曰く薛濤、曰く紫雲、曰く蘇小小、曰く琴操、曰く飄風、曰く樊素、曰く小蠻、曰く朝雲、わか朝に在りても、小野小町、常盤、靜、淀君以下國色少きに非ず、亦逐次に傳すべし

女媧の石、何ぞ悉く離恨の天を補はん、司馬の筆、何ぞ悉く相思の字を寫さん、われは本と白面の書生、文情索莫、如何んぞ廻鳳舞鸞の才あらん耶

宮崎來城

虞美人序

盧仲翔が曰く、生平知己一人を得ば、以て恨みざるべしと、飽の仲に於ける、虎の僑に於ける、噫亦かたし、此れ余が大に我友宮崎來城のために氣を吐かんと欲する所以也、けだし來城は筑の久留米の人人と爲り、多節磥砢、才を恃み、氣を負ひ、四方に周遊し、鴻爪或は蠻貊の地に留む、身世の閲歴する所、氣習の渲染する所、慷慨時を憂ひ、その心、一日も所謂る文士を以て自ら居るを願はずと雖、而かも詩賦文章、筆に任せて寫就し、章句の間、別樣の韻致多し、今や文名漸く海内に流布し、世上その奇才を艶稱するも亦璞の珪と爲り、璧と爲り、郊廟に薦められて、而して後ち特に君公の嘖嘖に達するに同じ、孰れか復た其眞價を知らん耶。

初め余の清國滬上に趣くや、吳楚の名流、或は來城の名を傳ふ、曰く今を距る一年の前、詩酒放浪して此地に到り、到る處に子建の才を弄し、江郎の管を揮ふと、余こゝに於て始めて騷壇無名の士に宮崎來城といふもの有るを知り、一度び手を握りて心を談ぜんと欲す、如何んぞ鴻飛冥冥、すでに閩越の間に趣き、山重水複、余に地を縮むるの術なし、悵然南雲を望んで而して止む。

越へて一年、余の東歸して筑の福陵に到るや、故人白河鯉洋と酒を儺川の水閣に飲む、時に鯉洋すでに來城と訂盟し、亦推稱するところ有り、余が心こゝに到て端なく傾倒し、遂に交を結ぶ、而かも來城は都門に在り、驛樹關雲、離隔千里、猶ほ相見るを得ず、唯だ魚雁に托して以て相問訊するのみ。

去年の冬、余の舊盟を尋ねて都門に入るや首として來城を訪ふ、來城も亦來り訪ふ、兩心傾倒、舊知のごとく、燭を剪り、酒を酌み、殆んと虛日なし、以て來城の人と爲りを知悉する也、宿昔の願こゝに至て始めて酬ゆ。

余の觀る所を以てするも亦來城は所謂る文士に非ず而かも其文に到りては則ち或は所謂る文士の文に拔出せるもの有り、鯉洋嘗て稱して曰く、來城の文は絢爛にして花の如く、清澄にして雪の如く雄警奇拔にして風雷の如く、古詩と、古文と、塡詞と、時文とを融化して以て篇を綴れるものに屬すと、誠とに然り、但だ此篇中記する所、もと何の書に出るか、余知らざる也、人に問ふ、人また知らざる也、けだし來城の清國に在るや、蜀の西、秦の北、浪遊千里、それ或は嘗て曹氏の石倉に到れる歟。

明治三十四年一月十八日、薇の烏城に於て認む

田岡嶺雲

虞美人自叙

楚の項羽、烏江に敗死してより、江上の古廟、雨打ち、苔爛るゝもの今に二千二百餘年、而かも其帳中の飲泣、慷慨悲壯、一退念此に至れば、即ち身は千載の後に在るも亦黯然として聲を呑む、此れ史家の宜しく特筆大書して以て虞姫の一生を傳ふべき所、かの戚姫、呂后の輩と迥然その科を殊にするもの有り、如何んぞ事蹟の湮淪せる、すでに龍門、昌黎の文の以て淋漓として而して之れを發揮するなく、また大白、少陵の詩の以て長歌して而して之れを痛哭するなし、前人なほ然り、後人顧みず、徒らに一篇虞兮の歌を剩して以て人口に噲炙せしむるのみ、文壇索莫、詞傑出でず、ア、此乾坤はこれ何等の時ぞ、誠とに歎恨のことに屬す、余や本と一介白面の書生、その世に

處するや、一切功名馳逐の地に於て、嘗て情に關する所なしと雖、而かも讀書品文、意の之く所に任せ、時に二三の知己と燭を燒き、杯を把り、議論風發、古今を商搉するに方りては、その樂み或は南面の王も亦換へがたきもの有り、一往神來、興會の已む能はざる所、遂に筆を咬で以て此篇を修む、けだし虞姫の事蹟の傳らざるや久し、古文人の文すでに之れを文にせず、古詩人の詩すでに之れを詩にせずんば、余、二千年の後に生れ、何に由りてか之れを知らん、加ふるに視は短也、步は尺也、學は牆面を慚づ、ァ、余ひとり何の斷簡零帙ありて而して能く之れを發揮せん歟。

稿を脫するの夕、人あり來り叩く、曰く、天下に圖史は多し、而かも虞姫の傳なし、われ聞く、蘇長公の少時試に赴くや、咄嗟の間、一篇の文を綴る、中に句あり、いふ、堯の時に當り、皐陶士となり、將に人を殺さんとす、皐陶之れを殺せといふもの三たび、堯之れを宥せといふもの三たび、故に天下皐陶が法を執るの堅なるを畏れて、而して堯が刑を用ゆるの寬なるを樂むと、有司その典故の由て出つる所を知るなし、擧げて長公に質す、長公が曰く、意まさに然るべしと、亦所謂る英雄人を欺くもの固より蚩蚩庸庸たる輩の端睨する能はざるところ多し、今先生の虞姫に於ける、其立傳、其着想、或は此に類する所なからんやと、余笑て答へず、その人撫然として去る。

此篇や、けだし多少の點染を免れずと雖、而かも豪傑の出處に、勢力の推移に、みな時地を確考すれば、則ち兒女の笑噱に供すべき外、或は亦史論の是非に悖らざるもの有るを見るべし、何そ必ずしも引用書籍の由て來る所を問はんや。

之れを要するに余は所謂る文士に非ず、少壯氣を負ひ、劍に仗りて

而して禹域の山川を跋渉し、その風俗を觀、その人情を察し、以て千古を凌轢せんと欲するの志を抱くもの多年、而かも今は則ち止めり、幾たびか變故に遭遇し、蓆帽青衫、詩を鬻ぎ、文を賣りて、而して都門に零落し、寂寥の境、之れに處して虞姫の傳を修め、修めて韓淮陰の少時、項楚王の末路に到れば、心恍然として百年は幻泡、世事は棋枰、向來の傀儡、一時ともに化するを覺ふ、感慨の相牽く所、極力之れを寫せば、その筆必ずしも斷蛟剸犀の利に非ずと雖、而かも亦或は剞劂に付するに足るもの有らん歟。

明治三十四年一月十日、東京駒込の僑居に於て

來城小隱

虞美人目次

第一　桓楚、騅、虞美人……一頁
第二　殷桃娘……一〇
第三　淮陰侯……二一
第四　鴻門の彈戟……二七
第五　慧眼、英雄を認む……三七
第六　破楚の大將軍……四一
第七　鴻飛冥冥……五三
第八　楚帳の好伴……六四
第九　固陵の營中……八〇
第十　刀折れ、馬嘶く、何の兆ぞ耶……九四

第十一　垓下の秋……一〇二
第十二　虞兮の歌……一〇八
第十三　虞美人草……一二〇

項羽本記一節

項王軍壁垓下、兵少食盡、漢軍及諸侯兵圍之數重、夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎、是何楚人之多也、項王則夜起飲帳中、有美人名虞、常幸從、駿馬名騅、常騎之、於是項王乃悲歌忼慨、自爲詩曰、力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何、歌數闋、美人和之、項王泣數行下、左右皆泣、莫能仰視、

虞美人

第一

桓楚、騅、虞美人

宮崎來城著

一杯の酒萬世の名を留むるも、生前一杯の酒に如かず、身は行樂のみ、その他を恤むに遑あらんや、百年の人千年の調を做すも、今に至りて誰れかとれ百年の人、一棺身を戢むれば、萬事すべて已む

書畫俗子の品題を受くるは三生の大刧に屬し、鼎彝市人と賞鑒するは千古の異寃に屬す

縱横五大洲、まさに項羽を奇特の人に推すべし、上下廿一史、まさに項羽を獨行の傳に列すべし、秦關の炬火、南内の秋草、天下に王たるも亦何の樂しむ所ぞ、一夢の人生五十年、一擲して以て快を一時に取り、羆熊の將帥を叱咤し、之れを視る兒群の如く、山河百戰、迹を滅

し、塵を掃ふ、誠に威風絶倫、千古その比を見るを罕にする所、もし夫れ垓下の一敗、楚歌四面に起りて、以て英雄未完の壯圖を斷送するに到りては、哀は則ち哀なりと雖、而かも猶ほ佳人の恩愛に負かざる有り、翠帳の涙、虞兮の歌、餘韻千秋、人口に膾炙し、天下後世をして長へに聲を呑み面を掩はしむ、之れを夫の漢高が一時九五の高きに倚り、抔土未だ乾かず、楷肉未だ冷へざるに、妬婦豪奴の爲にその兒孫を剪滅せられしに比すれば、亦頗る人意を強するに足るものの有り、

楚の項羽、名は藉、臨淮下相の人也、身のたけ八尺有餘、容貌魁偉、鬚髯神のごとく、力能く鼎を扛げ、才氣も亦人に超ゆ、初め起るの時、年二十有四、季父を項梁といふ、梁の父は即ち楚の將項燕、項氏世世汝南の項に封ぜらる、故に項氏を姓とす、項羽少き時、書を學ぶ、成らず、去り、劍を學ぶ、また成らず、項梁之れを怒る、項羽が曰く、書は以て姓名を記するに足るのみ、劍は一人の敵、學ぶに足らず、萬人の敵を學ばんと、兵法を學ぶに及ひ、心大に喜ひ、通曉するところ頗る多し、後ち秦の始皇帝の南のかた會稽に遊んで、浙江を渡るや、項羽、項梁と俱もに往て之れを觀、慨然として曰く、彼れ取て代るべしと、項梁慌しく項羽が口を掩ふて曰く、妄言する勿れ、族せられんと、誠に項羽は一介飄零の少年のみ、而かも其千古を凌鑠し、一世を呑吐するの慨ある、既に斯くの如し、何ぞ復た他年の龍驤虎躍を異まん耶

秦の二世の元年、陳涉兵を大澤の中に起す、會稽の假守殷通、項梁に謂て曰く、江西みな叛す、われも亦兵を出すに意あり、公何ぞ此に來りて我れを翼けざると、項梁佯り諾し、次日、項羽を携へ、往て殷通に謁し、談笑一刻、梁、羽を眴して曰く、行ふべしと、羽遂に劍を拔いて殷

通を斬る、殷通に一個の少女あり、名を桃娘といふ、今年齢まさに十九、倩慧詞翰に工みに、姿貌も亦一時に冠絶し、婥約として仙妹のごとく、天妃の如く、之れを望めば儼然たり、此時、坐して内房に在り、緋裙を繡ふ、變を聞き、躍りて匕首を手にし、將に父の難に赴かんとす、すでにして復た心に以謂らく、阿孃早く沒し、われに兄弟なく、殷氏の家門、唯た此一塊肉を留むるのみ、今死するも益なし、かつ退て以て報を圖らんには如かずと、遂に窓を踰へて而して遁る、而かも項羽未た嘗て之れを知らず、殷通の印綬を佩し、殷通の頭を持し、以て殷通の門下を殉ふ、門下大に驚き、みな劍を拔く、項羽因て數十百人を擊殺し、もと知る所の豪吏を召し、諭すに大事を起すのよしを以てし、遂に吳中の子弟を擧ぐ、八千人あり項羽に說て曰く、萬卒を得るは易く一將を得るは難し、今會稽の山に桓楚といふもの有り、勇略一

世に冠し、力よく五石の弓を挽き、氣骨岸然、凡庸に屈するを耻ぢ、塞を築き、盜を營み、天下を横行し、徒を聚むる八千人、將軍必ず秦を亡さんと欲せば、重く桓楚を用ゐよ、桓楚は即ち國士無雙なりと、項羽大に欣んで曰く、われも亦桓楚の俠名を聞くこと久しと、獨騎馳せて、山中に赴き、山塞を叩て桓楚を見るに、桓楚、身のたけ一丈、髮は束針の如く、面は方盆の如く、眼光爛爛として巖下の電を射る、所謂る燕頷虎頭、活して人に騎し、飛んで肉を食ふもの、勇略トすべし、項羽因て桓楚に說く、桓楚も亦頗る項羽を奇とし、遂に軀馳を以て驅馳を許し、精兵八千を率ゐて之れに從ふ、此夕、塗山の驛に宿す、驛に悍馬あり、偶ま櫪下を出でゝ閭中に來り、躍りて人を嚙み、人の傷くもの頗る多し、項羽之れを見、桓楚に謂て曰く、駿馬なりと、得て以て烏騅と名く、烏騅の毛色、濯濯として潤ふが如く、半は蒼白を帶び、蹄高く

耳聳へ、風度颯爽、龍池の霹靂も亦俱もに比するに足らざるもの有り。

此時、驛中に一個虞姓の老人あり、齡すでに六十、家に萬鍾の富ある に非すと雖、而かも夙に萬卷の書を讀破し、智德高く、局量寛に、能く 半瓢の粟を傾けて、以て饑餓を濟ひ、能く數椽の茅を葺て、以て孤寒 を庇ひ、孳孳善をなすが故に、鄉黨の之れを仰ぐ、赤子の慈母に於け るがごとく、冠、婚、葬、祭、いやしくも鄉會に在て、席次必ず第一に列す るを以て、人みな之れを稱して虞一公といふ、虞一公年四旬を過ぎ て猶ほ子なし、深く之れを憂ひ、會稽の禹廟に祈ると一年、一夕、夫人 趙氏五鸞の堂に亂飛するを夢み、身めるる有り、遂に一個の女子を生 む、女子生れて而して蘭體玉質、すでに長するに及び、艶十分、麗十分 其神や芙蓉の日に輝くがごとく、其形や楊柳の風を迎ふるがごと

く、春山澹澹その眉を修め、秋水盈盈その睛を流し、綽約比なく、光彩 人を射りて、人目奕然、嬋鬢の金釵に隨ひ、嬌面の桃花を帶ふ、瑤臺月 下の佳種に非ざれば即ち群玉山頭の神仙の謫下して以て風塵の 世に在るものなるかを疑ふ、加ふるに繡鴛刺蝶の慧性ありて志操 も亦明快に、四歲にして能く二南の詩を讀み、六歲にして文を屬し、 文才溢潤、學問頗る博く、鄉中の年少、姿容に美なるもの、結束濟楚、媚 態百出、自ら謂ふ、必ず虞家の美人に當るを得んと、美人睇みず、虞翁 も亦鍾愛之れを掌中の珠に比し、輕しく人に許さず、その項羽の塗 山に次するを聞くに及び、一夕之れをその家に迎へ、置酒歡待、項羽 に謂て曰く、われ將軍の名を聞くこと久し、何の幸かこゝに相見ん とは、聊か一杯を獻して、以て欽仰の情を叙ふと、さらに問ふて曰く、 將軍今年齡ひ幾許ぞ、曰く二十有四、曰く妻あるか、曰くなしと、虞翁

因て膝を進めて曰く、將軍年少氣鋭、他年必ず大貴の人となる可し、われ年すでに老ゆ、將軍の前途或は目する能はざるを恨む、唯た幸に一個の少女あり、聰明貞淑、一言一笑を惜み、少より詩書を讀み、略ほ大義に通曉し、年來佳婿を擇んで以て今に到る、今願くは將軍に奉して以て箕箒の婦にあつるを得んと、起て美人を呼ひ、項羽を拜せしむ、項羽醉眼を拭ひ、燭を倫んで嬋娟を照すに、誠とに絶世の名姫、心大に悅ひ、深深虞翁を拜し、佩ふる所の寶劍を出して之れを壽し、遂に約を結ぶ、此夕、項羽美人を伴ひ、牢く洞房の中に盟ふ、錦衾煖かに、角枕雙に、濃かに鴛鴦の夢を覆ひ、仙源路あり、桃花恙なく、之れを昨日刀を拔き、人を殺すの人に比すれば、宛然別樣、語溫に、骨軟く、鷄鳴一聲、曉に鸞鳳の魂を驚かすに到りて而して罷む、翌日桓楚の言に從ひ、滯在無聊、或は人馬の擾亂を招かんを恐れ、勿勿別を叙し、

美人及ひ族人虞子期を携へて城に歸り、項梁と謀り、吳中の豪傑を部署し、虞子期をして別軍に將たらしめ、桓楚を先鋒となし、兵を進めて下縣を徇ふ、項羽結束陣に臨み、獨語して曰く、精兵八千、先鋒に猛將桓楚あり、帳中に美人虞あり、騎するに駿馬雖あり、幸に二世の社稷を覆し、山河手に落ち、打て而して一丸となさば、則ち一世の豪快、たれか復たわれ項羽の右に出つるものぞと、意氣軒昂、眼中すでに敵なし、遂に江を渡りて而して西征す、江浪ために湧くもの十餘丈

第二　殷桃娘

虹蜺の氣を吐くものは風霜の色を挾むを貴ひ、日月の光に依るものは雨露の私を懷ふこと勿れ。

人を殺得するものは方に能く人を生得し、恩あるものは必然怨多し、もし陰ならず、陽ならず、世に隨ふて波靡せしめば、肉菩薩世に出づるも、世に何の補あらん耶。

燕市の醉泣、楚帳の悲歌、岐路の涕零、窮途の慟哭、一退念の此に及ぶごとに、身は千戟以後に在りと雖も亦感慨す。

時に殷桃娘、亡けて淮陽の居巣に在り、而かも一個柔軟の小女、衣食に途なく、露に飲し、風に餐し、流離困頓、所謂る虎豹千林の霧を離れて、復た鯨鯢萬里の波を渡るに同しく、髪亂れ、顏疲せ、鉛華全く褪めて形容枯槁す、憐むべし會稽山下名門の出を以て、辛酸一に此に到る、荆中の一宿、巖枕草被、如何んぞ一掬の涙なきを得んや、而かも桃

娘の守操は、凛凛として秋霜を白日に飛ばし、慷慨男子のごとく、常に父殷通が罪なくして兇徒の毒刃に死するを歎き、家門の薄ふして讐を報するに人なきを悲み、飲泣俯仰、心私かに白刃を磨礪し、一たび項羽の心に推し得て以て甘心し、併せて亡父の冤魂を九泉の下に慰めんと欲す、之れを待つこと幾旬、項羽兵を率ゐて居巣に到り、一日、獨り往て范增を旗鼓山下の草堂に訪ふ、往來三里、一路山多く、人稀なり、桃娘之を聞知し、躍起して曰く、此れ乘すべしと、之を追ふ、及はずして罷む、因て私かに匕首を挾み、項羽の營を覗ふ、一夜三更、桓楚出て、酒肆に飲み、醉歸して營前に到る、桃娘その覺られんとを恐れ、勿勿の間に一計を按出し、身自ら大地に擲ち、髪を亂らし、衣を裂き、口に黄泥を啣み、さらに朱唇を咬斷し、血を噴くこと潮のごとく、輾轉として而して反側す、桓楚之れを怪み、馳せ來り、扶起し

て而して誰何す、姚娘涙下ること雨よりも多く、氣結んで聲を出す能はざるものゝ如し、桓楚驚く大甚し、聲を放つて衞卒を呼び、扶けて營中に入り、面を洗はしめ、口を嗽がしめ、然る後その由來する所を問ふ、桃娘微かに朱唇を搖かし、かつ泣き、かつ語る、曰く、妾は本と河南の女子也、年甫めて十六、流寇の河南に臨むや、干戈滿眼、烽燧年に連り、人の家を焚き、人の財を掠め、驛亭慘亡、父母亂に死して、而して身は所を失ひ、遠く吳門に來りて、狹斜に落つ、時に一個の貴公子あり、相暱み、購ふに千金を以てし、深く金屋に貯へ、相好くするもの、彌年、何ぞ圖らん、公子の嫡妻、十分の悍妬、獅威虎に勝り、蛇毒双のごとく、一たび之れを知るや、必ず妾を得て以て甘心せんと欲す、公子やむを得ず、聲を呑で而して忍ひ、媒を召し、遣を議す、間に居るもの以て奇貨となし、遂に妾を偷み、今夕此に到る、妾や薄命なりと雖、而

かも重ねて路傍の花となり、牆頭の柳となり、媚を銷金鍋上に售るに忍ひず、途より亡げ、道に迷ひ、誤て軍門緊密の地を踏み、敢て威嚴を冒瀆す、加ふるに驛路の迢迢たる、十分の疲勞、一病の之れに乘する有り、以て地上に困倒す、將軍が一投足の助に由るに非さるより、は如何んぞ復た殘喘餘生を偷んで以て天日を仰くを得ん、眞に再生の恩也と、語、肺腑に出で、悲痛骨を刻み、聞くもの皆な涙を掩ふ、桓楚言を聞き、深くその薄命を憫み、次日、狀を具して項羽に聞す、項羽之れを虞美人に告く、虞美人は誠とに女子也、物に觸れ、事に感する尤も深し、項羽に請ふて曰く、將軍常に陣に臨み、妾ひとり帳中に在り、永日無聊、將軍何ぞ妾がために此薄命の人を收め、以て妾が左右に侍せしめざるかと、項羽之れを許し、以て桓楚に告ぐ、桓楚以て桃娘に告く、桃娘心躍るも、故らに三たび辭し、姓殷を憚り、姓蘇と改め、

蘇桃娘と稱し、然る後ち後帳に進む、多年の曝露、支離憔悴すと雖、而かも柔婉の態、楚楚人を動かす、美人一たひ見て、絶たゝれを憐れみ親ら薫沐をなし、纏ふに綺羅を以てし、飾るに珠翠を以てし、紅を施し、白を施し、用意周到、げだし桃娘は本と自ら天成の麗質、之れを久ふして光彩また發し、奕奕人を射る、その虞美人と袂を聯ねて歩を移すに方りては、則ち婉孌として姉妹の如く、誠に楚帳一對の艷品に屬す、

項羽が麾下の名將に汝駿といふもの有り、驍勇絶倫、而かも性甚だ色を好む、嘗て桃娘を帳外遊歩の際に見、神魂恍惚、目隨ひ、心迷ふ、桃娘その已れに意あるを知り、以爲らく、此れ便を復讐に取るべしと、因て亦秋波を一轉し、情を送り、柳を拂ひ、花を分ち、徘徊顧望して而して往く、斯くの如きもの幾旬、汝駿の心碎くるが如く、大息して曰く、眞に神仙中の人也、幸に之れを得ば封土千里も亦望む所に非ずと、一日桃娘ひとり出で、後園の中に在り、汝駿遙かに之れを望み、その側に人なきを見、心躍り、神馳せ、自ら禁ずる能はず、走りて桃娘に近く、桃娘羞赧、意を假りて避けんと欲す、汝駿忙しく其袖を捉へ、頻りに憐を乞ふ、桃娘黯然たるもの之れを久ふし、歎恨して曰く、好事魔多し、將軍速かに去れ、虞美人將に來らんとす、希くは明日晩間を以て將軍と此に期せんと、汝駿大に欣び、牢く約して而して歸る、越へて一夕、煙靄花を籠め、春月柳に横り、影よりも澹く、紗よりも薄し、汝駿早く往て桃娘を待つ、桃娘到る、十分の清粧、人の魂を消すもの頗る多しと雖、而かも憂愁不樂の態ありて雙眉を蹙め、羅巾を把り、頻りに眼涙を拭ふ、汝駿迎へ問ふて曰く、卿何が故に敢て此くのごとく然る、亦彩鸞の鷄塒に入るを痛恨するかと、桃娘因て故らに飲

泣し、汝駿の膝に伏して曰く、賤妾久しく楚帳に在り、以て虞美人に侍す、將軍の名を聞く、雷の耳に灌くがごとく、以謂らく、三軍の冠なりと、一たび將軍を柳花の際に見るに及び、眷々の心、端なく傾倒し、以謂らく、好丈夫、その聞く所ろに勝ると、昨日偶然袂を交へ、龍鍾憐まるゝの語を聞くに及び、歡天喜地、以謂らく、妾の不肖を以て將軍に箕箒に侍するを得ば、即ち一生の願定れりと、何ぞ意はん、項將軍の淫虐なる、昨夕に在て、敢て不良の心を起し、妾を死地に置く、妾拒む、力敵せず、遂に其辱を受く、妾や固より將軍のために心を刺して以て自ら明し、頸を刎ねて以て志を見すに難らずと雖、而かも一念將軍の身上に及び、一たび訣れを叙せんと欲し、辱を忍び、輙ち恥を荷も生を偷み、此に到りて將軍に謁す、願すでに酬ゆ、此身すでに汚さるれば、則ち復た英雄に事ふるを得ず、願くは將軍の前に死し、以て妾が將軍に負くの意なきを示さんと、懷に匕首を取り、涙下る雨の如く、顏色半は褪む、汝駿慌忙、之れを擁して曰く、われ卿が心を知ると、桃娘手に之を扯て曰く、將軍必ず妾を活す勿れ、徒らに憂愁の種を增すのみ、今生已に將軍と夫妻たる能はず、願くば來世に期せん、汝駿が曰く、われ今生に卿と夫妻たる能はずんば、固より蚩蚩庸庸、英雄男子に非ざる也、桃娘が曰く、妾の日を度る年の如し、將軍必ず憐れんで而して之れを救へと、暗に項羽を殺さんことを勸め、眼波一瞥、言の足らざる所を補ふ、汝駿慨然たり、臂を攘て曰く、わが力能く此滑賊を刺さんと、此より後、汝駿常に項羽を覘ふ、一夕遂に闇に乘じ、帳中に入り、項羽の臥榻に近く、衞士之れを覺り、來りて汝駿を圍む、汝駿大に怒り、齒を切り、眥を裂き、劍を拔て十數人を擊殺し、遂に捕へらる、桃娘之れを聞き、陰謀の露れんを怕れ、先んじて以て

人を制せんと欲し、虞美人に謂て曰く、汝駿禮なし、往日妾を後園の中に挑む、勢急に、事逼り、身は生死の間に在り、一時の繃縫、敢て項將軍の威嚴を冒瀆し、言を將軍に托し、以て之れを避く、此れ今汝駿か不良の心を抱く所以なり、路花牆柳、妾の身は自ら惜むに足らずと雖、而かも妾の一言のために麾下の名將を失ふに忍びず、緘默を守りて今日に到り、敢て帳下を騷擾せしむ、妾の罪大に、惡極まる、願くば死に就くを得んと、美人百方之れを慰藉し、狀を具して項羽に報ず、項羽大に駭く、垣楚が曰く、今汝駿は將軍が心腹の猛將にして、桃娘は乃ち一個流寓の賤妓のみ、もし此機會に乘じ、出して汝駿に賜はゞ、駿も亦恩に感じ、必す死を以て將軍に報ひん、むかしは楚の名臣蔣雄、楚王の侍姫に戲る、楚王究めずして、然る後ち其死力に因りて以て秦兵の難を遁る、所謂る禍を轉じて福となすは此に在り、將軍三たび之れを思へと、項羽首了す、桓楚出づ、かの虞子期も亦夙に情を桃娘に馳するもの也、此に於て妬火心曲を燒き、殆んと消す能はず、因て大に讒を搆へ、遂に汝駿を殺す、褒姒の幽王に於ける、西施の夫差に於ける、一把蛾眉の斧のみ、而かも能く男子の腹を割斷するもの古へより皆な然り、人それ悚然として懼れざるべけん耶

虞美人の桃娘を憐む太甚し、一日間に乘じ、桃娘に謂て曰く、われ汝を視るに、德性貞醇、體度莊雅、淑媛名閨と雖、而かも亦之れに過くるはなし、宜しく以て庸人の配となるべからず、わが族人に虞子期といふもの有り、智足り、謀多し、眞に汝に婿たるに堪へん、汝もし自ら決せば、われ當に赤繩を以て汝が兩人を繫くべしと、桃娘泣て拜して曰く、妾は惸惸たる賤妓、困苦伶仃、來りて宇下に托す、夫人の妾を遇する、誼すでに骨肉に踰ゆれば、生死、禍福たゞ夫人の命する所敢

て辭せずと雖、而かも身は嘗て狹斜に落ち、媚を勾欄に售り、笑を絳帳に鬻ぐ、固より大家の堂に登るを得ず、かつ虞將軍も亦年少に氣鋭に、偉業まさに緒に就く、當さに勉めて光大を圖り、青雲に努力すべし、愼んで兒女の情長きを以て英雄の氣をして短からしむる勿れと、美人その大體を知るを賞し、愈よ愛敬を加ふ、凡そ桃娘の楚帳に在る、溫順狸奴を學び、甘言蜜を啣んで而して心內常に自刄を礪き、凛凛秋霜のごとく、必す一たひ讐を項羽に報ひんと欲す、項羽も亦危し、薄氷すでに履む、桃娘も亦危し、虎穴すでに臨む、而かも桓楚と虞美人とは嘗て知る所なし、誰れか復た此壯圖未完の英雄を救はん耶、而かも汝駿はすでに斃る、誰れか復た此宿願未遂の少女を憐まん耶

第三　准陰侯

贊に曰ふ、君臣一體は古より難しとする所、相國深く薦めて壇に登らしめ、沙を沈め、水を決し、幟を拔き、殘を傳へ、漢にくみすれば漢重く、楚に歸すれば楚安しと大丈夫は須らく遠圖あるべし、眼孔輪のごとく、堂に處るの燕雀を怪むべし、豪杰寧ぞ壯志なからん、道に當るの豺狼を憂へず

局量寛大なれば、即ち三家村裡に住むも、光昜拘らず、智識卑微なれば縱へ五都の市中に居るも、神情亦促る、

騶は樞に伏すと雖、足は能く千里、鵠もし翅を垂るれば志は九霄に在り

天わが福を薄ふせは則ちわれ我德を厚ふして以て之れを迎へ、天わが形を勞すれば則ちわれ我心を逸して以て之れを補ひ、天わが遇を阨せば則ちわれ我道を亨して以て之れを通ず、即ち我も亦天に勝ち、天も亦われを如何んともする能はざるもの有り、われ深く世人の或は豪杰の士を顚倒するを怪む、而かも其之れを顚倒する

に慣れたるは、固より小人匹夫の輩、敢て意とするに足らずと雖、假面の豪杰、狹持する所のもの甚た小に、少しく辱めらるれば、劍を拔て起ち、身を挺して鬪ひ、以て遂に一生の大事を誤るに到る、誠とに歎恨のことに屬す、之れを要するに一眞一實、人は外姿を以て見るべからず、膽や能く天を破し、地を破し、千古を破し、來今を破し、識や能く天を驚し、地を驚し、千古を驚し、來今を驚するも、而かも其未た志を得ず、窮途に塵勞するに方りては、肉眼奇才を識らず、嘲侮交も加ふ、何ぞ料らん、一旦、勢に倚り、時に乘じ、風を呼ひ、雲を喚ひ、霹靂を青天に飛ばすに及んでや、さきに嘲侮せる所のもの始めて驚怖し、以て前度の妄言肆口を愧つ、燕市の擊筑、高陽の耽酒、古來その類多し、故に豪傑の士も亦此否塞の時に處しては、須らく人事の然る所以を思ひ、巧を拙に藏し、晦を用ゐて而して明に、清を濁に寓し、屈を以て伸とせずべし、此れ實に豪傑の作用、准陰侯韓信の如きも亦その一人歟

韓信は准陰の人也、始め布衣たりし時、貧にして行なし、推擇して吏となすを得ず、而かも其志は乃ち大に見るべし、初め母の死するや、家固より貧に、以て之れを葬るなしと雖、行て高敞の地に營み、その側らに萬家を置くべからしむ、此れ其他年に萬戸の封を期するに非ざるよりは、焉んぞ能く斯くの若くならん耶

韓信常に人に從ふて寄食す、人の之を厭ふもの多し、後ち下鄕に赴き、南昌の亭長に倚る、亭長の妻も亦之れを厭ひ、晨炊し、縟食し、食時に信往くも、ために食を具へず、信も亦頗る其意を知り、怒て之れを絶ち、歎して曰く、馮驩の鋏、彈し老ひて魚なく、荆軻の筑、擊ち來りて咽ふが如しと、復た准陰に來り、城下に釣す、一個の漂母あり、信が飢

たるを見、信に飯す、信善ぶ大甚し、漂母に謂て曰く、われ他年富貴とならば必ず以て重く母に報ずるあらんと、母怒て曰く、大丈夫自ら食する能はず、われ汝が流亡の公子ならんを哀み、以て食を進む、あに報を望まんやと、淮陰屠中の少年、或は信を侮るもの有り、信に謂て曰く、汝ぢ長大、好んで劍を帶ぶと雖も、而かも中情は乃ち怯きのみと、因て衆中に之れを辱めて曰く、信よく死せば我れを刺せ、死する能はずんば、わが袴下より出でよと、信熟ら之を視、俛して袴下より出て、而して匍伏す、一市の人みな信が怯なるを笑ふ、而かも信は乃ち恬然たり、頻りに食を漂母の家に乞ひ、以て幾旬を經過す、翻覆の人情、崎嶇の世路、前に蹶き、後に跌き、宿願違ひ易く、身に雄才大略を抱て而して風塵に苦む、亦所謂る花は風雨に因て色を爲し難く、人は貧寒のために氣揚らざるもの、古今同歎、誰れか慨然として

涙を下さざらん耶

楚の項梁、項羽の淮を渡りて盱眙に到るや、韓信劍に仗り、往て之れに從ふ、楚軍の參謀范增之れを相し、項梁に薦めて曰く、われ韓信と語るに、智足り、謀多し、將軍幸に重く用ゐて、以て賢を求むるの意を示さば、唯た信が長く留るのみに非ず、所在山洞の士も亦必す結髮し、來りて麾下に居らんことを願ふべしと、項梁因て韓信を召す、信至る、而かも其多年の零丁、形容の枯槁し、顏色の憔悴せるを見るに及び、傾倒の心、端なく消へ、纔かに拜して以て執戟郎に充つるのみ、從ふて秦軍を濮陽に破り、雎丘に破り、東阿に破り、一掃千里、功あり、賞なし、而かも項梁すでに三たび秦軍を破り、心頗る驕り、以爲らく弱秦くみし易きのみと、後ち定陶を圍むや韓信班を越へ、諫めて曰く、語に曰く、戰勝て而して將驕り卒惰るものは敗ると、將卒の日に

惰り、秦兵の日に加はる、將軍何の心か大軍を率ゐて堅城の下に頓するぞと、項梁大に怒り、叱して曰く、執戟の輩何をか知らんと、越へて幾日、項梁果して秦軍の返擊に遇ひ、城下に敗死す、韓信こゝに於て項羽に從ひ、河北に、漳南に、汗水に、連戰連捷、遂に秦關を叩く、戰功頗る多し、而かも官は猶ほ郎中に過ぎざるのみ、世路冥冥、青天も蚩尤の霧に障られ、人情夢のごとく、白日も巫女の雲に蔽はる、韓淮陰は本と城下に釣し、食を漂母に乞ふと雖、而かも絶世の將種、才雄に、略大に、何ぞ其れ任用せられざるの太甚しき耶

第四　鴻門の彈戟

定雲止水の中、鳶飛魚躍の景象あり、風狂雨驟の處、波恬浪靜の風光あり、事を處するは斬截ならざるべからず、心を存するは寛舒ならざるべからず、己を持するは嚴明ならざるべからず、人に與するは和氣ならざるべからず、江湖を涉るものにして然る後ち波濤の洶湧を知り、山嶽に登るものにして然る後ち蹊徑の崎嶇を知る、

古人言へる有り、曰く、人生古を好まずんば、象鼎彝尊も變じて瓦缶とならん、世道才を憐まずんば、鳳毛麟角も化して灰塵とならんと、此語を把りて韓信を論ずるに、韓信の雄才を以て、大略を以て、その寄托する所を誤るや功を積む多年、一得る所なし、而かも其楚を亡げ漢に歸するや、堂堂壇に登り、叱咤千里、名成り、志遂げ、南面して而して孤と稱するに到る、此に由て之れを觀れば、項羽も亦絶世の豪

傑たるを免れずと雖、而かも當時に在て人主の略あるもの固より漢の高祖皇帝歟、

漢の高祖皇帝なほ未だ志を得ず、一個の沛公を以て、諸侯の列に加り、楚の項羽と共に兵を聯ねて秦關を叩く、けだし沛公は帝堯の後裔、沛の豐邑の人に屬し、姓は劉、名は邦、字は季、季の母嘗て大澤の陂に息ひ、夢に神に遇ふ、時に天地晦冥、雷雨交も到り、樹を拔き、屋を倒す、父大公往て交龍を其上に見、異む太甚し、之を久ふして母身めるる有り、以て劉季を生む、劉季龍顏にして準高く、髯鬚尤も美に、左股に黑痣あり、凡そ七十有二、寛仁人を愛し、襟度磊落、雅量荒を包む、後ち長ずるに及んで、泗亭の亭長となり、秦都に繇役し、宮城を縱覽し、歎じて曰く、大丈夫まさに此くの如くなるべしと、單父の人に呂公といふもの有り、能く人を相す、劉季を相して曰く、われ人を相する多

し、季が相の如きは實に今世の見るを罕にする所、他日必ず大貴となる可し、季幸に自愛せよ、われに息女あり、願くば箕帚の妾となさんと、卒に劉季に予ふ、劉季大に悅び、偕もに居ること幾年、秦の二世の元年、遂に兵を起し、諸侯に應じて以て秦を攻む、戰將謀臣の之れに從ふもの蕭何、曹參、張良、樊噲等十餘輩、堅を拔き、銳を摧き、轉戰千里、先づ關中に入り、以て秦を亡し、還りて覇上に軍し、檄を傳へ、諸縣の父老及び四方の豪傑を召し、之れに謂て曰く、父老秦の苛政に苦しむ久し、われ諸侯と約す、先づ關中に入るものは之れに王たらんと、われ當に關中に王たるべし、因て茲に父老と約す、法は三章のみ、人を殺すものは死せん、人を傷くるものは罪せん、盜むものも亦罪せんと、父老大に喜び、涙下るもの有り、而して項羽も亦諸侯の兵を率ゐ、西のかた關に入らんと欲す、或ひと沛公に說き、關門を守らし

む、項羽至れり、關門閉たり、項羽大に怒り、攻めて之れを破る、此時に方り、項羽の兵四十萬、百萬と號し、鴻門に在り、沛公の兵十萬、覇上に在り、旌旗野を蔽ひ、刀戟森森、金鼓交も震ふ、韓信一夕范增に謂つて曰く、聞く沛公武關に入り、秋毫も害する所なく、秦民悅服すと、今にして之れを除かずんば、則ち必ず噬臍の悔あらん、范增が曰く、老夫も亦之れを憂ふと、因て項羽に說て曰く、沛公山東に居りし時、財貨を貪り、美姬を好む、今關に入り、財物取る所なく、婦女幸する所なし、此れ其志小に在らず、われ人をして其氣を望ましむるに、皆な龍となり、五采を成す、此れ天子の氣なり、急に擊て失ふこと勿れと、楚の左尹項伯は即ち項羽の季父、もと張良と善し、馳せて沛公の軍に赴き、私かに張良を呼び、具さに事を告け、俱もに遁れて難を避けんことを勸む、張良大に驚き、沛公に說き、以て項伯を厚遇せしむ、項伯營

に歸り、項羽に謂て曰く、沛公先づ關中を破らずんば、公焉んぞ敢て入らん、今ま人大功ありて而して之れを擊つは不義也と、次日沛公百餘騎を從へ、鴻門に來り、項羽に謝す、項羽之れを留め、俱もに飲む、項王と項伯は東嚮し、范增は南嚮し、沛公は北嚮し、張良は西嚮し、以て沛公に侍す、燎火席を照して、明晝のごとく、肉幾盤、酒幾壺、賓主各の相隔意し、默然語なく、强て而して薄醉を取るのみ、范增數ば項羽を目し、佩ぶる所の玉玦を擧げて以て之れを示すもの三たび、應へず、范增怒り、起て而して出で、勇士項莊をして入らしめ、劍を拔て舞ひ、因て沛公を擊たしむ、如何んぞ項伯の起舞し、常に身を以て之れを蔽ふ、項莊も亦擊つを得ず、范增切齒して曰く、將軍は誠とに婦人の仁のみ、大事まさに敗れんとす、上策すでに已み、下策も亦已む、今は唯だ其愛幸する所の美人を藉りて、以て一たび其心を挑發すべ

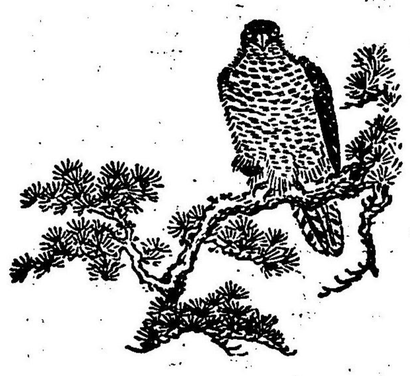
しと、走りて後帳の中に赴き、虞美人に謂て曰く、將軍人と爲り不忍、范增の智、項莊の勇、今や用ふる所なし、願くは夫人一たび往て將軍を慫慂せよ、劉邦にして而して此を脫せば、虎を野に放つが如く、必ずや哮號し來りて以て我肉を食はんと、美人結束し、起て曰く、亞父安んぜよ、妾愚なりと雖、必ず天下のために此害を除かんと、桃娘を從へ、馳せて之れに赴けば、則ち事すでに晩し、鴻飛冥冥、沛公すでに遁れ、筵すでに闌に、殘燭の下、唯た項羽の大杯を把り、漢將樊噲が劍を拔て肉を斫るを見るのみ、虞美人天を仰て歎恨し、嬌眼淚を浮べ、悄然歩を廻せば、夜色寥寥、慘風帳幕の外に咽ぶ

初め沛公の急なるや、張良門に出て、之れを參乘樊噲に告ぐ、樊噲かく、之れに曰く、壯士なり、之れに巵酒を賜へと、則ち斗巵酒を予ふ、項羽か曰く、之れに彘肩を賜へと、則ち一生彘肩を予ふ、樊噲立飲し、劍を拔き、肉を切りて之れを啗ひ、因て說くところ有り、沛公間に乘じ、起て厠に如き、樊噲を招き、俱もに覇上の軍に遁れんと欲す、項羽、都尉陣平をして沛公を召さしむ、沛公の曰く、今出づるも、未た辭せず、之れを爲す奈何ん、樊噲が曰く、大行は細瑾を顧みず、大禮は小讓を辭せず、今や彼れは刀俎と爲り、我れは魚肉と爲る、復た何をか辭せんと、因て張良をして留り謝せしむ、張良問て曰く、大王の來る、何をか操る、曰く、我れ白璧一雙を持し項王に獻ぜんと欲し、玉斗一雙を持し范增に與へんと欲すと雖、而かも其怒に遭ひ、敢て獻せず、公ために之れを獻ぜよ、張良か曰く諾と、此時に當り、項王の軍鴻門の下に在り、沛公の軍覇上に在り、相距ること四十里、沛公乃ち車騎を置き、將に

獨り身を脱せんとし、正に躊躇の間に在り、忽ち陣後に歌ふもの有り、戟を彈し、和して而して歌ふ、その聲朗朗、その歌に曰く、飢熊山を下り、石をあげて蟻を見、之れを呑て喉に入るゝも、咳嗽して出つる を妨げず、危い哉、危い哉と、張良之れを耳にし、密に之れを覗へば、一個雄偉の丈夫、面皮黄白に、神氣清爽に、長戟を執り微笑して而して立つ、因て慇懃に其名を問へば、乃ち答へて曰く、われは楚家の郎中、姓は韓、名は信、常に戟を執りて項王の麾下に從ふ、張先生必ず牢記じて忘るゝこと勿れと、之れを顧ふに韓信の楚軍に在ること既に幾年、功あり、賞なく、心常に平なる能はず、加ふるに今夕項羽が沛公を殺すに忍びざるを知り、心に以謂らく此れ婦人の仁、必ず其國を失はんと、沛公の風采を見るに及び、欽仰の心端なく傾倒し、以謂らく、堯眉舜目、天子の威也、後の富貴を思ふものは、須らく去て此人に

從ふべしと、因て此歌を歌ふて以て自ら薦むるの意を示すのみ、さらに歌ふて曰く、范老徒らに心を勞し、張良能く主を識る、今日鴻門を出づれば、明日寰宇を鎭めんと、戟を荷ひ悠然として去り、復た言はず、張良歎して曰く、名將の器なりと、恍然之れを目送するもの少時、時にかの虞美人ひとり桃娘を從へ、還りて此に到り、偶ま此光景を一瞥し、驚く太甚し、獨語して曰く、項王麾下の士にして既に款を沛公に通ずるもの有るかと、桃娘も亦以爲らく、夫の戟を彈じて歌ふものは誠とに非凡の豪傑、許駿、虞子期の比にあらず、而かも項羽に於て叛心あり、われ桃娘願くば此人の力に倚賴し、以て不俱戴天の仇を報ぜんと、一雙の慧眼、不出世の英雄を歌呼一闋の中に認む、後に卓家の孀あり、楊府の妓あり、雖而かも情のみ、才のみ、凛凛たる氣節に到りては、則ち古今其比を見るを罕にする所、桃娘あに尋

常一樣の巾幗ならん耶



第五　慧眼、英雄を認む、

良緣合ひ易く、紅葉も亦媒を爲すべし、知己投じ難く、白璧いまだ主を獲ることは能はず、

風聲を聽て以て思を興し、鶴唳を聞て以て懷を動し、莊生の逍遙を企て、尙子の清曠を慕ふ、

冷語、雋語、韻語は、即ち片語も亦九鼎より重く、傲骨、俠骨、媚骨は、即ち枯骨も千金を致すべし、

次日、項羽、虞美人及ひ桃娘と筵を設け、樂を張り、麾下の士を饗して、以て平日の勞を慰む、朱樓、綠幕、以て笑語の別坐の香を勾き、越舞、吳歌、以て慧舌の蓮花の艶を吐くなしと雖、而かも樽に酒あり、海の如く、盤に肉あり、山の如く、歷亂觴飛ひ、淋漓興湧き、彼れ醉ひ、此れ歌ふ、耶中韓信も亦筵に列して末席に在り、壯圖未轉の豪傑、意氣揚らず、

羅袂凄凉、復た人の顧みるなく、項羽の如きも亦冷澹に之れを遇するのみ、かの桃娘、ひとり何等の慧眼ぞ、一たび之れを衆坐の中に認むるに及び、心之れがために醉ひ、目を注て韓信を視る、韓信が坐に入りてより酒闌なるに至るまで、目他を視ず、凡そ韓信起てば、則ちその起つを視、韓信歩めば、則ちその歩むを視、韓信また座に就けば、則ちその座に就くを視、往けば則ち目送り、旋れば則ち目迎へ、已れ或は數歩の外に起てば、必ず頭を回らして韓信を視、之れを失はんを恐るゝが如し、韓信之れがために踊躍して自得せず、笑て而して左右に顧みるのみ、之れを要するに、桃娘は本と自ら謹慎の質、平素一顰一笑をだも惜む所、而して今は乃ち忽ち此の如し、虞美人深く之れを託異し、密かに其所以を詰る、桃娘自若たり、曰く、賤妾此人を視るに、容貌蒼悴、乞兒の一輩、宜しく此班に在る可らず、疑念滿腹、故

に目を離すを覺へざるのみと、美人言を聞き、亦覺えず失笑し、忙しく其口を掩ふ、げだし虞美人の人と爲り、慧は則ち慧なりと雖、鑑識のオを缺き、玉石同視、薫蕕一束、かの桃娘ひとり一雙の明眸を凝らして、以て才と頑とを風塵の中に辨じ、意に以謂らく、此れ所謂る執戟郎の韓信か、貌を顧みれば則ち蒼悴せりと雖、而かも中に人地の自ら軒軒たるもの有り、此れ必ず聰明の質、他年當に南面の王と爲り、權列熖を飛し、當道の豺狼を驅逐するの秋あるべし、坤輿は廣し、男子は多し、而かも韓信のごときは國士無雙、われの良に順ふ、韓信に順ふに非ざるよりは、復た何の地にか一生を托せん、われ昨夕門外に戟を彈じて而して歌ふものを聞き、心に豪傑の士なるを想ふ、今韓信を見るに、その貌、その聲、闇中に摸捉する所と略ぼ相同し、それ亦必ず韓信か、韓信も亦われ桃娘を拒まば、たとへ路を藍橋に尋

ね、媒を烏鵲に求むるも、必ず絶世の閨人に逢ふを得ずと、他を許し、自ら許し、眷戀の心、端なく傾倒して、以て頻りに眼波を廻轉す、夜すでに深く、酒すでに闌に、韓信の辭し歸らんとするや、桃娘手ら燭を秉り、之れを送り、軒に臨み、嬌羞を包み、韓信に問ふて曰く、項上將妾をして韓將軍の居所を問はしむ、將軍今住て何の處にか在ると、韓信驚訝す、而かも稱して項羽の命といふ、勢ひ答へざるを得ず、因て答て曰く、小人今住て南門の第一營に在り、幸に項將軍に謝せよと、飄然として出づ、桃娘なほ燭を揭げ、遠く路を照らし、以て韓信を目送す、一棧の火光、閃閃として林樹を穿ち、露氣流るゝかごとく、履聲の全く絶ゆるに及んで而して罷む。

第六　破楚の大將軍

既に敗るゝの事を救ふものは崖に臨むの馬を馭するが如し、輕しく一鞭を策つを休めよ、成に垂んとするの功を圖るものは灘に上るの舟を挽くが如し、少くも一棹を停むるなかれ、

貴人の貧士に交るや、驕色露れ易く、貧士の貴人に交るや、傲骨まさに存すべし、

靜かに坐して然る後ち平日の氣浮なるを知り、默を守りて然る後ち平日の言躁なるを知り、事を省て然る後ち平日の間を費すを知り、戶を閉て然る後ち平日の交濫なるを知り、慾を寡ふして然る後ち平日の病多なるを知り、情に近て然る後ち平日の念刻なるを知る、

精金美玉的の人品と做ちんと欲せば、必ず烈火中より煆來せよ、揭地掀天的の事功を立てんと思へば、必ず薄氷上に向て履過せよ、

世に汴和あり、然る後ち璧に連城の價あり、世に伯樂あり、然る後ち馬に千里の能あり、千里の馬は常に冀北に在り、連城の璧は常に楚

山に在りと雖、而も之れを拔き、之れを磋くの人なくんば、即ち璞のみ、駑のみ、從來豪傑の士を以て、轗軻不遇、生きて名なく、死して犬馬と同しく朽つるもの何ぞ限らん、余深く之を惜む、然りと雖も絶世の才は、錐の囊に處するか如く、必ず穎脫して而して出づ、大丈夫の此世に生れて、功を樹て、名を成さんと欲するものは、當に自ら勇往すべし、然る後ち用ひられさるは、用ゆるものゝ罪のみ、亡げて燕に之き、趙に之き、秦に之き、漢に之く、天下あに復た一人の知己なしと爲さん耶。

楚の項羽は誠とに絶世の豪傑、喑啞叱咤、千人みな癈ると雖、而かも苑增、韓信の諫を納れて漢の沛公を殺す能はず、遂に之れを蜀に封じ、漢王となし、自ら號して西楚の覇王といひ、諸侯に號令し、以て人心の多半は叛くを知らず、時に漢の張良、猶ほ留りて楚に在り、項羽

の季父項伯の家に寓し、遙かに漢王のために楚の君臣を離間す、而かも智の足り、謀の多き、項羽のために恠まれんを憂ひ、朝夕酒を飲み、頽然として自放す、項伯、張良に問ふて曰く、先生今より何の地に餘生を托せんと欲するか、張良曰く、良は誠とに韓人のみ、博浪の一槌、志を達せずと雖、而かも項王の力を藉り、秦を亡し、讐を報し、宿願すでに酬ゆ、復た名利に奔走し、聞達を王侯に求むるを願はず、願くば世を遁れて玄玄の術を學び、逍遙の遊に耽り、許巢を箕山に訪ひ、夷齊を首陽に跡ね、辟穀し、導引して以て殘喘餘生を偷むを得んと、項伯以て項羽に告く、項羽聞て大に悅ぶ、一日、張良無聊に勝えず、歩して後園の中に逍遙す、綠竹千竿、青松幾株、竹は池を環り、松は門に望む、門内に逕あり、逕曲らんと欲す、逕轉じて屏あり、屏小ならんと欲す、屏進んで階あり、階平ならんと欲す、階畔に花あり、花鮮なら

んと欲す、花外に牆あり、牆低からんと欲す、牆内に石あり、石恠ならんと欲す、石間に路あり、路分れんと欲す、路合ふて橋あり、橋危からんと欲す、橋邊に樹あり、樹高からんと欲す、樹蔭に草あり、草多からんと欲す、草上に渠あり、渠細からんと欲す、渠引て泉あり、泉甘からんと欲す、泉去て山あり、山深ふして塵稀に、中に一個の小屋を搆ふ屋の大さ八九間、楣に題して萬卷書樓といふ、張良は本と韓國の書生、性尤も讀書を好む、心に以爲らく、語にいふ、書あり讀むべきは、人生第一の厚福なりと、われ今日無聊、就て之れを讀むも亦た快心のことに屬すと、闥を排し、室に入れば、則ち秦火も亦及ばざるものあるか、或は斷簡零帙に屬すと雖、而かも上下箱に盈ち、高低架に充ち古を積み、今を積む、加ふる項伯が尚書令たる、四方の奏狀、一に此に達するが故に、謄寫の時文も亦頗る多し、張良手に任せて横陳し、一

一之れを玩讀す、その中或は不通の論あり、或は偏私の說あり、或は賢を薦むるもの有り、或は讒を進むるもの有り、取るに足るもの至て少し、唯一篇、誰れ人の草する所か、落筆沈痛、時事を語りて指すが如く、正に、大に、讀むものをして悚然として襟を整へしむ、その文臣聞く、天下を治むるの道は、天下の勢を審にするを貴び、天下の勢を審にするは天下の機を識るを貴ぶ、所謂る勢とは何ぞや、曰く虛實を察し、强弱を明にし、利害を知り、得失を詳にす、然る後ち天下は得て而して理むべし、然らずんば則ち勝を一時に制するも、特に其勇力を恃むに過ぎず、終には必ず敗亡せん、未た以て其勢を與もにするに足らざるのみ、所謂機とは何ぞや、曰く興亡を辨じ、治亂を定め、幾微を窮め、隱匿を明かにす、然る後ち天下は得て而して圖るべし、然らずんば則ち兵馬倥偬、苟も國を得べきも

終に久しく安じ難し、未だ以て其機を會するに足らざるのみ、今大王關中に覇たりと雖、人心未た服せず、根本未だ立たず、民固より其強を畏れ、其威を惧るると雖、而かも強は弱すべし、威は抑ゆべし、大王徒らに之れを恃み、一旦餒て而して振はざらしむれば、天下は一日たも居るべからず、此れ臣が寒心して大王の爲に憂ふる所以に屬す、かつ劉邦むかし山東に居りし時、財を貪り、色を好む、今關中に入り、財寶取る所なく、婦女幸する所なく、法三章を約し、仁を施し、恩を垂れ、人心を收束す、此れその志の小に在らざるを見るべし、秦民も亦悅服し、關中の主と爲るを得ざるを恨む、而かも大王の秦關を叩くや、實にその道に反せるもの有り、讒邪の言を聽き、嬴秦の弊を蹈み、子嬰を殺し、驪山を堀り、阿房を焚き、人を殺す草のごとし、遂に秦の降卒二十萬を坑するに到る、げだし

亦勢の審にすべく、機の察すべく、弊端惡孽の天下に隱伏して未だ動かざるを知らざるに由るのみ、もし劉邦をして一呼して而して起たしめんか、諸侯は響應し、強を期せずして自ら強く、勝を期せずして自ら勝ち、大王の恃む所のものは皆な劉邦の得る所とならん、況や頃日棧道を焚絶し、大王をして其東歸を疑はざらしめ、三秦をして之れか嚴備を爲さゞらしむるが如きは、其心一に西蜀の民を收用し、關中の地を克復するに在り、此れ所謂る天下の勢を審にし、天下の機を識るもの、劉邦先づ我心を得たり、而かも大王茫然、或は之れを知るなく、左右の將士も唯だ武を用ゐ、獨り勝つを以て天下敵なしと爲す、敗亡の禍すでに不測の中に萌す、此れ臣が衆人の己れを誚るを顧ず、敢て大王のために之れを言ふ所以に屬す、臣惟ふに今の計を爲すものは、即ち兵をまし、

備を嚴にし、邊關を巡哨し、章邯等三人を收回し、別に智勇の士を撰んで關門を阻塞し、さらに劉邦の家眷を收めて輦轂の下に拘引し、都を咸陽に建て、昭かに仁義を布き、兵馬を整飾し、行伍を訓練し、內に賢相を求め、外に元戎を訪ひ、諸侯を制服し、周政を遵行するに如くはなし、然る後、劉邦敢て東向せず、社稷も亦磐石の固きあらん、臣稽首謹言

張良翻覆之れを讀み、驚歎するもの之れを久ふし、喟然として曰く、

磻溪の呂望、辛野の伊尹の類歟、稿末に名を署せざる、その何人の手に出づるを知らずと、强而も文に因り、人を想ふに、必ずや雄才大略眞に能く之れを用ゐば、帝業も亦興すべしと、また瞿然として曰く、

西楚なほ人有り、漢王未た志を成す能はずと、正に攢眉の間に在りたまたま項伯の來るにあひ、迎へて之れを問ふ、項伯も亦歎して曰く、魯麟周鳳、なほ未た時に遇はず、此れ淮陰の韓信が作る所、信や本と貧寒の書生、復た人の齒するなし、亞父范增ひとり之れを奇とし類りに項王に薦む、項王用ゆる能はず、纔かに執戟郎となし、以て麾下に留む、獻策幾回、後ち此書を上るに及び、項王大に怒り、罪に行はんと欲す、われ亞父と之れを救解し、始めて事なきを得たるのみ、先生之れを思へ、世道才を憐まずんば、則ち鳳毛麟角も亦化して灰塵とならんと、語語肺腑の中より出づ、張良言を聞き、かつ驚き、かつ喜ぶ、心に以謂らく、疇昔の夜、鴻門に戟を彈して歌ふものは韓信に非ず耶、當時われ已に韓信を奇として、而して韓信も亦心を漢に傾く、われ必ず沛公のために韓信を得て、漢の臣となし、以て破楚の大將軍となさん、然る後ち天下は定むべし、帝業は建つべしと、越へて幾旬、遂に意を決し、從容として項伯に謂て曰く、輦轂の下、喧囂紛華、紅

塵門を埋め、驚沙面を撲つ、靜修は固より難し、物外に鴻冥するに非ざるよりは、焉んぞ登仙の路を得んと、因て山に歸らんことを請ふ、項伯その去志の甚た決するを知り、復た抑留せず、之れを東門の外に祖道す、海濶天空、閒鷗高く飛ひ、深く江南の野水を厭ふものゝ如し、誰れか復たその胸中の雄謀大略を知らん耶

張良の項伯に別るゝや、貌を變じ、服を改め、道裝して復た城に入り、敗廟の下に寢宿するもの兩三夕、一夕月明に乘じ、韓信を其營に叩き、携ふる所の寶劍を贈り、交を結ひ、楚を亡げて漢に歸せんことを勸む、韓信慨然として曰く、僕も亦夙に此志あり、駑駘と雖、あに空しく奴隷人の手に斷死するに忍びんやと、因てその計の出つる所を問ふ、張良が曰く我れ往日漢王に別るの時、必ず破楚の大將軍を得て以て之れを薦めんとを蕭何に約す、將軍先づ往て蕭何に語れ、漢

王も亦必ず重く將軍を用ゐんと、因て一幅の地圖を袖中に出し、几上に披き、指點して曰く、われすでに蜀の棧道を焚く、內外阻斷、商旅も亦往來せず、唯た一個の烏道あり、以て蜀中に赴くべし、斜谷を越へ、陳倉に向ひ、孤雲山を廻り、鷄頭山に出づれば、行程凡そ一百八十里、將軍幸に路を此に取るべしと、韓信大に喜ぶ、此に於て淮陰に歸り、舊故を省ると聲言し、匆匆行李を理む、亞父范增之れを聞き、驚く太甚し、即日項羽に謁し、說て曰く、執戟郎韓信まさに亡げんとす、大王必ず厚く之れを用ゐよと、項羽笑て曰く、韓信は嘗て食を漂母に乞ふもの、亡ぐるも亦道途に餓死せんのみ、先生意とする勿れ、范增が曰く、大王の誤見も亦太甚し、必ず厚く用ゆる能はずんば、速に之れを殺せ、他日大王の天下を亡さんものは必ず韓信ならんと、苦諫頗る力む、項羽遂に之れを諾して曰く、われ一度び先生のために明

日を以て斬に處せん、范增が曰く、幸甚しと、時に虞美人も亦其側に在り、帳中に歸るに及び、之を桃娘に告く、桃娘心動き、以謂らく、事ずでに逼る、韓信は誠とに天下無雙の豪傑、わが心に百年を許し、勇略を藉りて以て亡父の讎を酬ひんと欲する所、今之れを殺さば、何の處にか此零丁の微軀を托せん、救はざるべからずと、夜三更、人みな寢ぬるに及ひ、服を改め、鏡を照し、嫣笑一番、墨を磨し、筆を咬み、一書を作りて卓上に遺し、飄然門を出づ、夜色沈沈、萬籟聲なく、月は地に滿ち、霜は天に滿つ。

第七　鴻飛冥冥

桃葉情を題し、柳絲恨を牽く、胡天胡帝、登徒こゝに於て目を怡し、雲となり、雨となり、宋玉因て而して心を蕩し、泉刀を輕んずること土壤のごとく、居然擊袖の朱家、然諾を重んずる丘山のごとく、紅粧を添へざるの季布、慈悲の筏、人を濟して相思の海に出でしめ、恩愛の梯、人を接して離恨の天を下らしむ。

肝膽たれか憐まん、形影自ら管鮑と爲る、唇齒相濟ふ、天涯たれか是れ窮交、ともに言ふて此に及べば、輙ち再び絕交の論を廣め、重ねて畧門の句を作らんと欲す

山水花月の際に美人を看れば、更らに韻多きを覺ふ、美人韻を山水花月に借るに非ず、山水花月美人を借りて韻を生ずるのみ。

獨雁連營を過ぎ、劒戟聲なく、天地寂寥、韓信ひとり影を寒幕に抱き、霜夜寐ねず、營門の外に徘徊すれば、四山月白く、霜は氷柯に降り、偏へに寒風の冷然たるを覺ふ、寢に就き、復た蒲團に坐し、坐らに身生

を思ひ、因て喟然たるもの之れを久ふし、漢楚の二傑を商量し、心に決するところ有り、獨語して曰く、項王の人と爲り、喑啞叱咤、千人みな廢ると雖、而かも賢將に任屬する能はず、此れ特に匹夫の勇のみ、項王人を見れば、恭敬慈愛、言語嘔嘔、能く人のために涕泣し、能く人のために飲食を分つと雖、而かも封爵を有功の人に授くる能はず、此れ特に婦人の仁のみ、項王の過くる所、殘滅せざるものなく、天下怨み、百姓附かず、此れ名は天下覇たりと雖、而かも實は天下の心を失ふ、百萬の衆を擁するも亦何の利する所ぞ、却て漢王を見るに、誠とに其道に反し、能く天下の城邑を以て功臣に封し、天下の武勇に任じ、身は蜀の山中に在り、日夜東歸を思ふの士を率ゆ、何の所か誅せざらん、何の所か服せざらん、われ既に張良と約す、速かに往て之れに歸せん、萬戸の侯も亦手に唾して而して得べしと、正に點頭得

意の間に在り、人の刺を通じて而して來るもの有り、曰く、項王の所より來ると、韓信疑懼する太甚し、以て隱謀すでに曝露せりと爲し、猛然として起ち、左手に劍を持し、右手に燭を剪り、之れを室に迎へて、以て之れを照すに、一個端麗の美少年、衣服娟楚、面は白粉を施すがごとく、所謂る玉樹の皎として風前に臨むの概あり、因て座を命じ、寒溫を叙し、然る後ち語を交ゆ、少年が曰く、僕は項王の記室、姓を殷といふ、深夜に來り、敢て將軍の臥榻を驚かす所以のものは項王の命を齎らして以て將軍に傳ふるのみ、將軍は誠とに希世の人傑、識見高邁、機微を洞察すること鬼神のごとし、請ふ今嘗試みに之れを猜せよ、韓信が曰く、龍歟、彪歟、熊歟、羆歟、虎歟、貔歟、われにト筮の占すべきなし、固より之れを猜するを得ずと雖、而かも亦一時の清興請ふ之れを言はん、僕今歸心矢よりも急に、すでに行李を理む、項王

聞知し、之れを留めんと欲するか、曰く、猜し得て中らず、さらに一猜せよ、曰く、われ往日奏諫する所あり、以て威嚴を冒瀆す、それ或は罪を獲るには非ざるか、曰く、猜し得て亦復た中らず、僕請ふ命を傳へん、虞美人に一個の少妹あり、淑質、艶光、顏盛に、色茂り、思操も亦明快に、能く士丈夫の賢否を辨別す、嘗昔の夕、項王の麾下の士を筵する や、少妹帳後に在り、密かに將軍の風度を偷視し、神飛び、魂馳せ、虞美人に語て曰く、女子嫁せざれば則ち已む、嫁すれば則ち韓將軍の如きに配して以て夫妻たるを得んと、項王その纏綿の情を憐み、僕をして命を將軍に傳へ、併せて伐柯の勞を執らしむ、將軍あに意なけんやと、韓信默して語なし、之れを久ふし、辭して曰く、わがために大王に謝せよ、韓信もと客士に飄泊し、食を漂母に乞ひ、辱を袴間に忍ぶ、溝壑に遺せざるを得て、以て今日あるを致すは、一に大王の力に

因る、今一旦富貴にして、また此過愛に遭ふ、寧ぞ踴躍して從ふを欲せざらん、唯だ命を奉ずる能はざる所以のものは、大王は四海に君臨し、韓信は衣食に奔走す、大節の關する所、宮府の中、少しく情緣に涉り、威信從ふて地に墜つれば、則ち何を以てか天下の牧伯を御せん、韓信は誠とに准陰の儒夫、身は惜むに足らずと雖、而かも大王の府中を玷辱せんを惧る、敢て辭すと、少年聽かず、頻りに促して曰く、將軍惑へり、將軍にして一たび虞少妹を娶らば、項王に於て兄弟の親あり、兄すでに天下に君臨して、弟なほ執戟の官に居るの理あらんや、韓信が曰く、此れ韓信が尤も心に愧づる所、妻妾の聯姻に倚り、俄かに富貴を享くるは、一生の不幸、天下後世それ我れを何とか謂はん、われ當に男子の身を珍惜して、以て自ら輕視することなかるべしと、志を持する甚だ固し、少年復た之れを如何ともする能はず、

因て嚇して曰く、項王今日天下に號令し、生殺與奪の權、一に其手に在て、而して性尤も急躁、將軍にして今此好緣を辭すれば、激怒忽ち到り、身首處を異にするに到らん、將軍なほ之れを甘んずるかと、韓信言を聞き、怫然として怒り、色を作して曰く、誠とに君が言ふ所の如くんば、此事斷して諸はず、大丈夫の此世に處する、威武も屈する能はず、富貴も淫する能はず、此心すでに決す、速かに去れ、復た多辨を費す勿れ、死生は命のみ、信や此に死せんと、一語は一語より激す、少年顏色頓に變し、遽かに起ち、忙しく衣裳を脫し、忙しく冠を脫し、身を韓信の坐前に擲ち汪然として泣て曰く、事遂に諸はざるかと、韓信大に驚異し、之れを扶起すれば、則ち少年は少年に非ず、緋裙紅裳、粉白く、黛綠に、姿色清艶、浮にして華ならず、嫻にして克く靜に、趙瘦楊肥、兼ねて而して之れ有り、誠とに絕世の佳人に屬す、韓信その

面を熟視し、さらに驚て曰く、夫人は虞美人の侍姫に非ずや、何を以て此に到る、曰く、妾は誠とに桃娘也、疇昔の夕、將軍の風采に筵上に咫尺してより、眷戀の思、抑ゆる能はず、一たび將軍の恩寵に浴し、百年の命を緬めんと欲し、羞を忍んで此に在り、將軍の木强なる、事すでに諸はずんば、生を偷むも、徒らに耻を取るのみ、冀くは將軍の劍を乞ひ、將軍の前に自刎し、以て妾が心を明さんと、かつ泣き、かつ語る、韓信惻然、心に以謂らく、大凡そ淑媛名閨、才に豐かなるものは則ち色に嗇む、今才の色と、併せ有て兩ら得る、業に已に斯くの如くんは、關雎、夭桃の德、問はずして知るべしと、初め此に至るに意なし、而かも心ずでに動く、因て慰藉して曰く、夫人もし先づ實を明さば、心を勞する一に何ぞ此に到らんと、桃娘色然として驚喜相半す、而かも涙下ること猶ほ雨より多し、仰て韓信に謂て曰く、將軍今夕妾を

携へ此を遁れよ、項王明日を以て將軍を害せんと欲すと、因て范增の奏狀を出して韓信に示す、韓信驚く太甚し、桃娘また曰く、妾が父は本と會稽の大守、項羽の毒刄に斃る、不俱戴天の仇、前に在り、猶ほ未た報ゆるに及ばずして此を去るば、頗る恨惜に堪へずと雖、而かも將軍の身上を念ひ、禁を犯して此に到る、速かに遁れざるべからず、將軍も亦あに徒らに死を待つものならんやと、韓信覺へず涙下り桃娘の手を把り、謝して曰く、夫人は誠にわが再生の恩人、世世報を圖らん、ひとり四門の閉ぢ、守衛の密なる、如何んしてか能く此城を出でん、桃娘が曰く、將軍憂ふる勿れ、妾も亦預め此事あるを知り、府中の官符二枚を窃む、馬も取るべし、門も開くべしと、因て復た男裝し、走りて府中に赴き、官符を示し、廐人を欺き、駿馬二匹を奪ひ、一は韓信に授け、一は自ら騎し、遂に城を出づ、桃娘が曰く、淮陰に歸らば、追兵必ず迫らん、蜀に走りて漢王に倚るに如かずと、韓信莞爾として曰く、然り、信も亦此意ありと、俱に騎を聯ねて安平關を踰ゆ、驛路迢迢、江雲漠漠、天長く、地濶く、馬上に相顧み、笑て曰く、小丈夫なるかな項將軍と、歡天喜地、天下何物か能く之れに加へん耶

次日、項王、虞美人と桃娘の日高ふして猶ほ未だ起きざるを異み、往て絳帳を推せば、帳中闃然、卓上に一封の遺書あり、匆匆披て之れを讀むに、その文

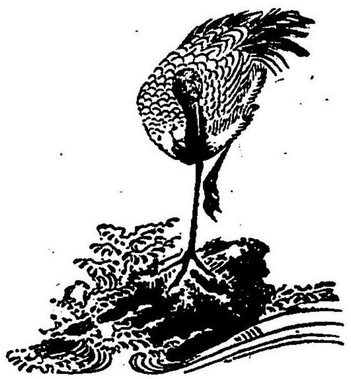
賤妾桃娘は本と會稽の大守殷通の女也、夙に香閨の中に在り、常に鯉庭の箴を聽き、一家の團欒、歡笑して相樂む、何ぞ料らん、父の非命に死するに及んでや、道途に流離し、耻を忍ぶもの幾旬、因て以爲らく、不俱戴天の讎、報ひざるべからずと、一念此に及ぶ毎に忽然生を忘れ、遂に大王の麾下を欺き、夫人の帳中に宿し、懷に匕

首を挾み、一たび大王の身に加へて以て甘心せんと欲す、如何んぞ、大王の勇敢なる、夫人の縝密なる、賤妾の幺麽を以てし、蟷螂の斧を揮ふに同じく、之を久ふして嘗て機の乘ずべきなし、蒲柳の弱質、英雄男子の手を藉りて以て志を遂ぐるに非ずんは何を以てか能く亡父の靈を九泉の下に慰めんや、今こゝに良を擇び、韓將軍と俱もに亡ぐ、大王、夫人、癡蝶狂蜂の徒らに花に迷ふの故態を演し以て多年の恩に負くものと同視するなくんは幸甚

項羽大に怒りて曰く、奴輩亡狀なりと、桓楚に命し、騎二百を率ゐて之れを追はしむ、虞美人諫めて曰く、狂蜂癡蝶の芳を趁ひ、蕊を貪るは花を殘ひ、香を敗る多し、と雖、而かも風人の能く花を愛するものの之れを惡むを忘るゝ所以は、其韻致を得て、以て我吟心を成すのみ、咎むる勿れ、かつ其亡げてより既に六日、追ふも亦何ぞ及はんと、

乃ち止む、

桃娘は誠とに一個蒲柳の弱質のみ、才色は姑らく之れを措き、誠あり、節あり、また人を知るの鑒を具ふ、亦偉なりと謂ふべし、史に傳ふ、韓信の漢を亡ぐるや、蕭何之れを追ふと、夫れ蕭何は宰相なり、鑒識固より當に此くの如かるべし、何ぞ桃娘が之れを楚軍執戟の中に識るに如かんや耶



第八　楚帳の好伴

俗氣骨に入れば、則ち刀を呑んで腸を刮り、灰を飲で胃を洗ふも、俗態の益呈するを覺へ、正氣靈を效せば、則ち刀鋸前に在り、鼎鑊後に在るも、英風の益す露はるゝを見る。

人毎に余が胸中に鬼ありと誤ふ、余謂ふ、鬼自ら端なく吾腕中に入る、吾腕中未だ嘗て鬼あらず、人毎に余が目中に人なきを責む、余謂ふ、人自ら吾目中に入るを屑とせず、吾目中未だ嘗て人なくんばあらず

爭の平なりがたきや天折れ地絶ゆるも亦自ら屈するの期なし、報の已まざるや、鬼哭じ神愁ふ奚ぞ相安んずるの日あらん、

漢の元年、韓信大に漢に用ゐられ、破楚の大將軍となり、大兵を率ゐ、故道より巴蜀を出て、以て三秦の地を定む、漢王こゝに於て諸侯の兵凡そ五十六萬人を率ゐて、東のかた楚を伐つ、時に項羽齊を徇へて北海に在り、虞美人ひとり彭城に在り、彭城の守將彭越、楚に叛いて漢王に降る、けだし彭城は項羽の關中より歸りて新に都せる所、五歩に一樓、十歩に一閣、簷牙は青丘の外に啄み、廊腰は碧池の上に廻り、盤盤焉、囷囷焉、貫は朽ち、粟は陳れ、珠玉珍寶、磊磊として洹河の沙よりも多く、後宮の中或は多少の粉黛を蓄ふ、漢王みて欣ぶ、太甚しみな之れを收む、虞美人急なり、虞子期に謂て曰く、彭越すでに叛し、劉邦すでに到る、汝も亦降らんと欲するか、子期泣て曰く、われ塗山に躬耕するもの多年、幸に項王の知遇を受け、北に討し、南に征し、功、戰將を加へ、以て此富貴を享く、常に骨を碎き、身を粉にするも亦報を爲すに足らざるを恨む、今や此禍亂に遭遇し、一たび身を挺し、必ず彭越と雌雄を決せんと欲すと雖、而かも項王の夫人を托する任や重し、願くば一たび齊に走り、然る後ち必ず此賊を殺さんと美人欣然として曰く、われも亦徒に賊子の手に死するを願はずと、因

て七首を懷に取り、之れに授けて曰く、滿眼の風塵、漢兵四に滿つ、一旦緩急あらば必ず先つ我れを刺せ、此れ項王の嘗て寵賜する所なりと、遂に夜に乘し、縋して城を出て、星夜に馳せて齊に赴き、以て變を上る、項羽怒て曰く、奴輩恩を忘れ、義に背き、敢て我封内を蹂躙すと、問て曰く、劉邦今何事をか爲す、曰く、既に財寶美人を收め、日に酒を置き、諸將と飲宴し、將驕り、卒懈る、擊て破るべしと、項羽言を聞き、起て盤舞して曰く、我れ勝てりと、即日諸將を部署し、鍾離昧をして齊を拒がしめ、自ら精兵三萬を從へ、西のかた蕭晨より出で、東のかた彭城に到り、日中、大に漢軍を破る、漢軍みな走り、相隨ふて泗水、穀水に赴き、死するもの十餘萬、殘卒走りて靈壁に赴く、楚軍また之れを擊ち、また之れを睢水に擠し、また之れを殺すもの十餘萬、睢水ために流れず、時に猛風西北より起り、樹を拔き、屋を發き、沙石を飛ばし、咫尺晦冥、漢王を圍むこと三匝、たまたま漢の別軍の逢迎するに會ひ、漢王數十騎と遁れ、家室を收めて西せんと欲し、轉して沛に出づれば、家みな亡び、籬落蕭條、雞犬群を留めず、唯た途に一子一女を得たるのみ、而かも父太公及ひ夫人呂氏とは已に楚軍のために拘へられ、項羽の陣に在り、漢王之れを聞き痛哭するもの三日、幸に韓信が關中の兵を發し、來りて彭城の殘卒を收拾するにあひ、漢軍復た振ひ、連りに西楚を破る、楚始めて衰ふ、

漢の四年、漢王諸侯の兵を率ゐて廣武に陣す、項羽も亦來りて之れに臨む、相守る十餘旬、時に叛將彭越大梁の地に在り、楚の糧道を絕ち、以て項羽を苦む、項羽之れを惱む、虞美人が曰く、一時劉邦を却けんと欲せば、俘囚を還すに如かずと、一夕、漢王の父太公及ひ夫人呂氏を饗し、從容として說て曰く、わが項王は慈仁なり、公の家眷を出

し、漢王をして一家團欒の樂を取らしめんと欲す、公何ぞ一字を惜み、漢王をして兵を罷めしめざるや、太公の曰く、劉邦今や念、富貴に重く、名を貪り、色を好み、親故を視ること路人のごとく、書を贈るも必ず益なし、而も既に命を受く、老夫如何ぞ從はざらん、恨むらくば年老ひ、力折れ、方寸すでに亂れ、殆んど筆を下すに懶し、聞く夫人は絶世の才調、吐囑尤も妙なりと、願くば老夫がために之れを辨ぜよと、抑も美人は誠とに女子也、花にも涙を灑き、鳥にも心を傷む、今や此語を聞き、九腸寸斷、偏に太公の年に臨んで萬死の境に沈むを悲み、呂氏の辜なくして縗絰の辱に在るを憫み、漣漣として涙下るもの有り、呂氏も亦泣く、呂氏と虞美人と兩人對坐、涙に和して筆を咬み、彼れ一句、此れ一章、以て一篇悲痛の文を綴る、その文

太公書を劉邦に寄す、嘗て謂ふ、虞舜の大孝は天下を棄つる敝屣

の如しと、爾ぢ何が故に富貴を以て重しと爲し、我れを視ること路人の如くなる耶、唯水に虜に遭ふてより、今に三年、幸に項王の好生の德を垂れ、即ち誅を加へざるに因り、公所に拘處し、日に飲食を給し、性命を延すを得たるのみ、呂氏も亦子女を思想し、涙乾く能はず、爾ぢ意に任せて天下に縱横し、略ぼ以て念と爲さず、所謂る鐵石の心腸、土木の形骸か、即今項王われを取りて廣武に臨み、累次に誅を要し、頭を成皐に懸けて以て爾が不孝の名を彰はさんと欲す、われ再三哀告し、特に家書を修めて爾に付す、爾ぢ思へ、此身何れより來り、世間萬物、何を以て重しとなす、もし此理を解せば、便ち大舜か天下を棄つるか如くならんのみ、爾ぢ其れ速かに兵を罷め、我を取り、國に還り、父子夫妻をして完聚せしめよ、もし前に仍り、兵を屯し、相爭決せば、我命保ちがたし、爾能く天下

を得るも、此れ父を殺して富貴を圖る、天下後世必ず唾罵せん、爾が心あに能く自ら安んぜん耶、楮に臨で泣血す、爾ぢ當に自省すべし

項羽一讀し、曰く、字字沈痛、紙泣き、墨咽ぶ、劉邦此書を讀み、涙を下し、命を奉ぜずんは即ち禽鹿にして衣冠せるものゝのみと、因て太公をして謄寫せしめ、中大夫宋子連に命じ、齎らして以て漢王の陣に赴かしむ、漢王心傷み、計を張良に諮ふ、張良か曰く、此れ一時我兵を却けんと欲するのみと、因て策を授け、子連を延見せしむ、子連入る、一室の中、杯盤狼藉、漢王醉て泥の如く、朦朧たる困眼を開き、太公の書を讀み、一切意に經せざるものに似たり、流涎を拭ひ、子連に謂て曰く、項王さきに義帝を弑し、諸侯の怨望する所となる、今復た人の父を殺さば、何を以てか天下に對せんと、侍女に扶起せられて帳中

に入り、復た一言の骨肉に及ぶなし、張良陳平と交も出で、以て子連を饗す、子連歸り報ず、項羽が曰く、劉邦は誠とに無賴の小人のみ、焉んぞ孝悌の道を論ずるに堪えんと、因て復た戰ひ、利あらずして退く偶ま細作の來り告ぐるもの有り、曰く、韓信諸侯の兵五十六萬を率ゐ、將に來り會せんとし、今すでに途に在り、曰く、蕭何の糧を搬ぶ、滎陽より成皐に及び、四百八十里の間、牛肩相摩し、車轂相擊つと、項羽大に驚いて曰く、われ久しく此に在り、疲兵三萬、食も亦つく、ともに鋒を爭ひがたしと、十分の憂慮、諸將みな色を失ふ、桓楚が曰く、願くば今太公を俎上に縛し、以て沛公を威嚇するを得んと、項羽之れに從ふ、廣武城の東に高壇あり、屹立幾仞、以て漢軍を俯瞰すべし、因て高俎を其上に設け、太公を其上に置き、遙かに漢王に告げて曰く、今速に降らずんば、われ太公を烹殺せんと、漢王の曰く、われ汝と俱

とに北面して命を懷王に受け、約して兄弟と爲る、乃ちわが翁は即ち汝が翁なり、汝ち必ず汝が翁を烹んと欲せば、則ち幸に我に一杯の羹を分てと、因て項羽の罪を數ふ、項羽大に怒り、太公を殺さんと欲す、季父項伯もと心を漢に歸す、諫めて曰く、漢の劉邦今大王と鹿を中原に爭ひ、家眷の拘囚せらるゝものこゝに三年、秋毫も經意せざる所以は、その心江山に在り、凡そ天下を爲むるものは家を顧みず、之れを殺すも何の益か有る、適まを以て禍を取るのみと、虞美人も亦切諫す、曰く、漢楚の勝敗、何ぞ太公の生死に由らん、大王幸に天下の笑を取ること勿れと、項羽之れに從ふ、漢王營に歸り諸將に謂て曰く、太公すでに鼎鑊に臨む、今日僅かに免ると雖、而かも明日は必ず楚賊の毒刃に死せん、子として之れを救ふ能はずんば、何の面目ありて天下に對せんやと、慟哭聲を呑み、氣結んで言ふ能はず、張良か曰く、臣に一計あり、幸に意とする勿れと、楚人の降りて麾下に在るものを擇び、勵ますに重賞を以てし、楚軍に赴き、一封の書を項伯に達せしむ、その書にいふ

舊交張良白す、大楚大司馬項老將軍麾下、むかしは館穀の恩を受け、情誼殷勤、骨肉に踰ゆるもの有り、感激曷ぞ已まん、後ち雲水の遊に託するに及び、富貴心なく、功名念を絶つ、何ぞ料らん、宿願違ひ易く、此に羈絆せられ、以て苟も居諸を送る、他に求むる所あるには非ず、但だ漢王仁慈の心、天下の弱を濟はんと欲し、千里奔走、連年暴露、誼、捨て去るに忍びざるもの有り、故に左右に懋懋し、烏の人に依るが如く、人自ら之れを愛せば、安んぞ晏然高坐して一籌を畫せざるを得んや、昨は覇王太公を烹んと欲す、實は漢王を退くるの計を爲すのみ、今や漢王兵を此に駐む、もし退かずんば、

霸王必ず太公を烹ん、太公烹らるれば、復た生すべからず、他日漢王將軍と藍田の約を復し、秦晉の交を成さば、將軍何の面目あり て之れと相見んや、良こゝに鴻便に因り、書を托して上瀆す、倘し太公烹らるゝの時、一言の力阻、救援を賜ふを得ば、太公は再造の德を蒙り、漢王は不孝の名を免れ、恩義かね到り、仁覆きはめ無し、もし良か請乞する所を允さるれば、幸に回音を付し、以て惕勵の懷を慰めよ、懇切惓惓の至りに堪へず、張良白

項伯讀み了りて愴然神を傷め、使を勞し、匆匆返簡を作り、携へ歸らしむ、その書にいふ、

久しく舊交に隙く、思遐かに、心切に、忽ち來示を辱ふす、敢て命の如くせざらん耶、但し兵を罷め、和を講ずるは乃ち大に國家に利あり、太公久しく此に稽ふ、某や心を傾け朝夕に維持し、供給缺乏に至らずと雖、而かも意を刮り兵を息めずんば、太公何を以てか國に歸るを得ん、某は誠とに救援するも一時の計たるを免れず、左右常に太公を殺すを勸む、倘し一怒回らずんば、恐らくば永保し難し、足下それ之れを籌れ、

張良こゝに於て陳平と謀り、漢王に謂て曰く、今や西楚の陣中、食つき、兵罷る、往て和を求めば、太公かへるべしと、陸賈をして項羽を說かしむ、聽かず、復た洛陽の儒生侯生を遣る、因て說て曰く、天の君を立るは民を治むる所以に屬す、徒に擾擾し、黔首をして日に鋒鏑を蹈んで而して其堵に安ずる能はざらしむるは、何ぞ以て君たるに足らん耶、大王の劉邦と衡を爭ふ、茲に幾年、枕骸野に遍ねく、鷄犬群を失ふ、父母の心あるもの誰れか復た能く忍びん耶、大王幸に劉邦が請を許せ、大王の孝道をひろむる所以は、人の父を烹ざるに在り、

大王の名節を明にする所以は、人の妻を辱めざるに在り、拘囚三年、禮して而して之を遣らば、雅量包荒、天下欽仰、大王の威名此れより四海に溢るゝに到らんと、慫慂頗る力む、項王も亦頗る干戈の久しきに惓み、糧食の絶へ、兵の老ゆ、固より其敵に非ざるを知るや、遂に之れに從ひ、天下を中分し、鴻溝以東は項羽に屬し、鴻溝以西は漢王に屬せしむ、

此夕、項羽筵を陣中に設け、以て太公及びその家眷を饗す、漢王の夫人呂氏と虞美人とは、もと自ら仇讎に屬すと雖、而かも同居三年、疎は密となり、遠は彌となり、時に月中に並坐し、時に花間に偕行し、各の慰勉の辭を陳べ、半は愁思の句を吐き、同情の相憐む所、交誼愈よ摯に、或は骨肉に踰ゆるもの有るに到る、今や此遠別に方り、追隨たゞ此夕を惜み、再會の何の年に在るかを悲み、覺へず巾を沾し、殘燭

の下、縷々として相語る、筵の將に罷んとするに及び、虞美人慨然として呂氏に謂て曰く、漢楚すでに爭を息め、懷王の約を存して、以て兄弟の情を失はずんば、則ち妾と夫人とは即ち姉、即ち妹、干戈八年風塵厭ふべし、願くば今より各其主とする所に說き、長く干戈を弄するなからしめん、此れ唯だ姉妹二人が坐ら燕樂を享くるのみに非ず、百姓をして枕席に安んぜしむる所以に屬す、夫人加餐せよ、今夕の別れ、夫人は當に家に歸り、團欒の樂を得べし、賀すべしと雖、而かも妾や閨帷の好朋を失ふ、山重水複、驛路千里、再ひ相見るは何の時にか在る、時に好風に因り、德音を惠めと、語語肺腑より出づ、呂氏謝して曰く、賤妾不敏と雖、敢て教を受けざらん、と、因て寵遇の恩を謝し、拘囚の苦を慰め、虞美人は明鏡一奩を出し、呂氏は金釵一股を留めて以て相贈り、韶鍾として而して別を惜む、一坐ために袖を掩

ふ、

越へて一日、項羽、漢王と面約し、太公以下の家眷を歸し、即刻兵を引て而して東に歸る、漢王も亦西に歸らんと欲す、張良と陳平とこれに說て曰く、漢、天下の大半を包有し、諸侯爭ひ附く、此れ天、楚を亡すの時に屬す、機に乘じて遂にこれを取らんには如かず、今釋して擊たずんは、此れ所謂る虎を養ふて自ら患を遺すもの也と、漢王これに從ふ、項羽すでに約し、その彭城に歸るや、諸將をして各その家に就かしめ、獨り虞美人を携へ、酒を樓上に置き、日夕優遊して以て自ら樂む、居ること三旬、漢軍の漸く東下するを聞くに及ひ、怒りて曰く、劉邦翻覆、恩を忘れ、義に背く、我れ必ず此賊を殺さんと、遂に令を諸軍に傳へ、進んで固陵に向ふ、而かして干戈また眼に滿つ、けだし史に傳ふ、初め漢王の項羽と彭城に戰ふや、羽のために敗られ、勢甚

た急に、携ふる所の二子を車より推墮し、以てこれを棄つ、從士夏侯嬰常にこれを收む、漢王怒り、嬰を斬らんと欲するもの、十餘回、謂ふ、吾力此二子を存する能はずと、已むを得ずして棄つるも亦可なりと雖、而かも他人ためにこれを收むるは則ち大幸と謂ふべし、何そ斷斷然とじてこれを斬らんと欲するか、其性の殘忍かくの如く、能く二子に忍ぶ、父に於ても亦然り、項羽が太公を俎上に置くに當り赫焰畏る可く、身を措くに地なし、而して分羹の言、優游暇豫、其口に出で恬として愧づるを知らず、幸に項羽、項伯の言を聽き、これを報し、漢王をして不孝の名を免れしむ、萬一その憤怒に激せば、漢王はた何を以てか處せん、これを項羽が約を重し、義を守るに比すれば、其人品の高下果して如何んぞ耶。

第九　固陵の營中

偉人世祚を扶けんと欲するも、而かも權、己れにあらず、宵人能く鼎鉉を覆して而して宴安に溺る、腕を時艱に扼するものは、徒らに之れを蓐帽青鞋の士に屬し、時に熱血を露はすものは、或は反て優伶口技の中に在り、事理人言に因りて悟るものは、悟る有るも亦迷ふ有り、總て自悟の了了に如かず、意與外境より得るものは、得る有るも亦失ふ有り、總て自得の休休に如かず、丹の藏する所のものは赤、墨の藏する所のものは黑、

漢の五年、漢王陽夏の南に到り、軍を止む、項羽兵罷れ、食少し、歎して曰く、當日范增わが韓信を用ゆる能はざるを諫む、我れ不明にして之を曉ず、以て此に到る、眞に慚恨に堪えずと、時に韓信大兵を擁して固陵に在り、齊人蒯通は本と遊說の士、辯は蘇張を駕し、頗る奇計を好む、嘗て流落して吳中に來り、虞美人の父虞一公に寄り、衣食多

年、虞美人も亦略ぼその音容を記す、語に曰く、家貧にして良妻を思ひ、國亂れて賢臣を思ふと、今や虞美人項羽の側に侍し、その感慨を分取し、日夕憂悶、忽焉として此蒯通に思到し、臂を攘て曰く、地覆り、天翻り、大事すでに問ふべからず、われ一介の巾幗と雖、而かも項王の恩寵に沐浴する茲に八年、骨を碎き、身を粉にするも亦報を爲すに足らず、何ぞ驛路の艱難を憚らんやと、一夕、告ずして出て、垢面塵衣、扮して流亡の婦と爲り、食を行路に乞ひ、以て固陵に赴く、驛樹天に連り、關雲地に接し、荒涼千里、戰後の江山、尋常の客旅も亦俯仰に堪へざる所、楚王の寵姬を以て、露飲風餐の途に就く、目を傷め、心を痛ましむるもの頗る多し、往て固陵に到り、蒯通の門を叩き、告くるに來意を以てし、かつ曰く、昔は蘇張三寸の舌を揮ひ、六國を縱橫す、今先生の雄略は蘇張も亦及はざる所、願くば西楚のために一投足

の勞を惜む勿れと、語切に、泣下る、蒯通感激し、心を指して曰く、通の虞公の恩に浴する深し、通の夫人の志に感する多し、通不敏と雖、敢て力を效さゞらんやと、次日、相人を以て韓信に說て曰く、僕嘗て相人の術を受く、曰く、先生の人を相るは何如ん、曰く、貴賤は骨法に在り、憂喜は容色に在り、成敗は決斷に在り、此を以て之れを參せば、萬一を失はず、曰く、善し、先生のわれを相るは何如ん、曰く、願くば少し く間せよ、曰く、左右去れ、曰く、君の面を相れば封侯のみ、また危しと雖、而かも君の背を相れは則ち大に貴し、曰く何の謂ひぞやと、通因て膝を進めて曰く、初め天下の難を發するや、俊雄豪傑、建號一呼、雲のごとく集り、霧のごとく合ふ、此時に當り、憂は亡秦に在り、今漢楚分れ爭ひ、天下無罪の人をして肝膽地に塗れしめ、遍野の枕骸、勝て數ふべからず、楚人彭城に起り、轉鬪北くるを逐ひ、滎陽に到り、利に

乘して席卷し、威、天下に震ふ、然れども、兵、京索の間に困み、西山に迫て而して進む能はざるもの玆に三年、漢王數十萬の衆に將とし、一日數戰、尺寸の功なく、敗北救はず、滎陽に敗れ、城皐に傷き、遂に宛葉の間に走る、此れ所謂る智勇俱もに困むものに非ずや、夫れ銳氣險寨に挫けて、而して糧食內府に竭くれば、百姓罷れ、怨望を極め、容容倚る所なし、臣を以て之れを料るに、その勢、天下の賢聖に非さるよりは、固より天下の禍を息むる能はず、當今兩主の命は足下に懸る、足下漢のためにすれば則ち漢勝ち、楚のためにすれば則ち楚勝つ、臣願くは腹心を披き、肝膽を輸び、以て愚計を效さん、唯だ足下の用ゆる能はざるゝのみ、誠に能く臣が計を聽かば、兩ら利して俱もに之を存するに如くはなし、天下を三分し、鼎足して其勢に居り、敢て先づ動くと勿れ、夫れ足下の賢聖を以て甲兵の衆あり、强齊

に據り、燕趙を從へ、空虛の地に出でゝ、而して其後を制し、民の欲に因りて西嚮し、百姓のために命を請はゞ、則ち天下は風走し、響應し、孰か敢て聽かざらん、大を割き、强を削り、以て諸侯を立つれば、天下は服聽し、德に齊に歸せん、齊の故を案するに、膠泗の地あり、諸侯の德を懷き、深拱揖讓すれば則ち天下の君王、相率ゐて齊に朝す、けだし聞く、天與へ、取らざれば反て咎を受け、時至り、行はざれば反て殃を受くと、願くば足下熟ら之を慮れ、韓信が曰く、漢王われを遇する甚だ厚し、われ焉んぞ利に嚮ひ、義に倍くべけんや、通が曰く、われ聞く、勇略主に震ふものは身危く、功、天下を蓋ふものは賞せられずと、請ふ足下の功略を言はん、足下西河を渉りて魏王を虜にし、夏說を擒にし、兵を引て井徑を下り、成安君を誅し、趙を徇へ、燕を脅し、齊を定め、東、龍且を殺し、南、楚人の兵二十萬を摧く、此れ所謂る功、天下に

二なく、略、不世出のものに非ず耶、今足下震主の威を戴き、不賞の功を挾み、楚に歸すれば、楚人信せず、漢に歸すれば、漢人震恐す、足下こゝを持して安くに歸せんと欲するか、夫れ勢ひ人臣の位にありて而して震主の威あり、名、天下に高し、われ竊かに足下のために之を危むと、韓信謝して曰く、先生旦らく休せよ、われ將に之を念はんとすと、後ち數日、蒯通また說て曰く、厮養の役に隨ふものは萬乘の權を失ひ、儋石の祿を守るものは卿相の位を失ふ、故に知は決の斷なり、疑は事の害なり、毫釐の小計を審にし、天下の大數を遺し、智、誠とに之れを知り、決、敢て行はざるものは百事の禍のみ、故に曰く、猛虎の猶豫は、蜂蠆の致螫に如かず、騏驥の跼躅は、駑馬の安步に如かずと、かつ功名は成りがたく、敗れ易し、時は得がたく、失ひ易し、時か、時は再び來らず、願くば足下之れを詳察せよと、韓信猶豫し、漢に倍く

に忍びず、また自ら功多く、漢終に我齊を奪はずと爲し、遂に蒯通を謝す、通痛罵して曰く、細苛に迫るものは、ともに大事を圖るべからず、臣虜に拘はるものは、固より君王の意なしと、遂に出づ、われ今蒯通の說く所に由て之れを稽ふるに、言韓信に補ひ多し、乃ち說て韓信を藏弓烹狗の禍に脫ずる能はず、聽の過ち、計の失する所、また之れを如何んともする能はずと、雖、而かも他年の謀反は實に此言に動く所あるのみ、識見の大、あに蘇張の舌に任せて一時の快を合に取るものと同日の論ならんや耶

蒯通說て聽かれず、一は韓信の必ず後禍に遭はんを惜み、一は虞美人の遠來に酬ゆるなきを慨き、佯狂して巫と爲り、將に虞美人を伴ひ楚に之かんと欲す、虞美人從はず、謂ふ、われ來るの時、意すでに決す、一死何をか惜まんと、獨り身を挺して韓信の營に赴く、刀槍森森、

矛戟層層、旌旗日に耀き、鼓角風に震ひ、馬躍り、兵列ぶ、虞美人故らに恐怖の狀をなし、因て宿衞の士を欺き、韓夫人桃娘の舊知と稱し、以て謁を求む、挑娘出で迎へ、相見るに及び、心大に駭く、而かも侍姫の或は悟らんを怕れ、眉語して別房に導き、手を握りて曰く、夫人恙なきか、何を以て此に到ると、悲喜交も到り、淚數行下る、美人も亦默然たり、曰く、地覆天翻、楚國の大事すでに問ふべからず、夫人に非ずんば、孰か復た妾が夫妻を救はんと、語るに驛路の苦辛を以てし、相擁して而して泣く、因て韓信に說て曰く、漢王は翻覆常なし、其身賞て數ば項王の掌中に在り、項王憐んで之れを活すも、而かも脫するを得れば輒ち約に倍き、以て項王の分を侵し、項王の地を奪ふ、その親信すべからざる斯くの如し、今將軍自ら漢王を以て厚交となし、之れがために力を出し、兵を用ゆるも、終に其爪牙に死せん、幸に須臾

を得て今に至る所以は、一に項王の猶ほ存するを以てのみ、當今漢楚の事、權將軍に在り、將軍右に投ずれば則ち漢王勝ち、左に投ずれは則ち項王勝つ、項王今日亡ぶれば、則ち明日將軍を取らん、將軍項王と故あり、項王當時將軍を風塵に逸すと雖、而かも今や深く自ら其不明を愧ぢ、連夜或は目睫を交へざるもの有り、將軍何ぞ其心を憫み、漢に反いて以て天下を三分せざると、一語は一語より切に、絶て粉脂の口氣なく、半は古策士の雄辨を學ぶ、韓信その語を把り、之れを蒯通の言に比し、覺へず感激し、慰藉して曰く、夫人遠來、辛勞想ふべし、唯だ此一夕を待て、われ今一たび之れを念はんと、桃娘も亦坐ろに虞美人の孤衷を憐み、心殆んと裂け、腸殆んと斷ゆ、而かも一片復讐の志、凛凛として秋霜の如く、身自ら責めて曰く、汝が家何くにか在る、汝が父何くにか在ると、因て從容として韓信に謂て曰く

君嘗て項王に事ふ、官は郎中のみ、位は執戟のみ、言聽れず、計用られず、然る後ち漢に歸す、漢王、君に上將軍の印を授け、君に數萬の衆を予へ、衣を解て君に衣せ、食を推して君に食せ、君をして此に到らしむ、夫れ人深く我を信し、我れ之れに倍くは不祥、虞美人の言、理ありと雖、而かも一時の利害を以て天下の笑を取ること勿れと、韓信首了す、此に於て日夕虞美人を饗し、以て相勤勉す、虞美人顧みず、哭して曰く、窮鳥懷に投ずれば獵夫も亦之れを憫む、今將軍一世の人傑を以て、坐ら大兵を擁し、聽過り計失ひ、秋毫も災を分つの意なし、賤妾既に告げずして來り、志を遂ぐる能はず、何の面目か天下に對せんや、唯た當に此に死すべし、將軍幸に賤妾か頭を斫り、以て之れを項王の陣に函送せよと、血涙の下ること雨よりも多し、而かも韓信終に意を決して救はず、西楚に送歸せんと欲す、桃娘以爲らく、楚の

亡ふる旦夕に在り、絶世の芳姿を併せ、之れを併沙荒草の中に忍ひずと、遂に別殿の中に勾囚し、厚遇して以て幾日を留む

時に漢王陽夏の南に在り、張良を遣り韓信を促し、彭越と力を併せて楚軍を擊たしむ、韓信命を奉じ、計を賓師李左車に問ふ、李左車は本と趙國の謀將、智足り、謀多し、韓信の趙を亡ほすや、縛して而して麾下に致すもの有り、韓信その縛を解き、西嚮して之れに師事し以て今に到る、此に於て李左車、韓信に謂て曰く、われ聞く、敗軍の將は以て勇を言ふべからず、亡國の大夫は以て存を圖るべからず、今われは敗亡の慮、固より大事を權るに足らずと雖、而かも久しく將軍の帳下に在り、深く知遇の恩を被る、願くば以て其萬一を報ぜん、將軍唯た速に牙營を九里山の南に進め、以て項王の軍を壓せよ、われ自ら奇策ありと、因て韓信の耳に附し、細説するところ有り、韓信手

を拍て快を呼ふ、

憐むべし虞美人、桃娘のために固陵の別殿に勾囚せられてより、孤影怯れ、弱魂飄り、日夕無聊、乾坤の將に覆らんとするを悲み、十分の歎恨、今は唯だ一抓の瘦腰を剩すのみ、一夕殘燭の下、耿耿寐ねず、ひとり沈思の際に在り、偶ま一個魁梧の髯丈夫あり、猛士二三を從へ、牆を踰へ、來りて虞美人を促し、說て曰く、我は趙國の遺臣李左車なり、夙に項王の勇名を慕ひ、常に謂ふ、此れ眞にわが從遊を願ふ所なりと、身は齊に在り、心は楚に在り、翹望多年、夫人の此に臨むは、則ち天の我孤衷を憐むに似たり、夫人幸にわれを項王の麾下に薦めば、われ今夫人を奉じて西楚に歸らんと、事勿勿に出づ、美人の心、多少の驚訝なきに非ずと雖、而かも窮猿は林に投じて木を擇ぶに遑なし、身すでに必死の地を履む、復た蛟鱷の淵に臨むも、一たび此虎狼

の崖を遁れんと欲し意を決して之れに從ひ壁に梯して而して出で星夜に奔馳して彭城に歸る項羽欣ぶ甚し虞美人罪を乞ひ宛轉泣て曰く臣妾自ら力を量らず一念家國に重く奔走千里以て大王を辱むる理當に速に死に即くべし乃ち敢て生を偷む所以は一たび大王に謁し臣妾の他なきを明にせんと欲してのみ今幸に謁するを得れば願すでに足る請ふ死せんと項羽も亦凄然涙下る曰く我れ德薄く智少く百戰力折れ一個の嬋娟を庇ふ能はず卿をして徒らに憂苦し荊棘に間關して以て此に到らしむ罪さらに大なり何ぞ卿を咎めんと溫言慰藉因て李左車に告げて曰く先生雄略深謀趙に在りし時遙に名聲を聞き心之を慕ふ今や大駕を迎へ歡天喜地の至りに堪ずと李左車謝して曰く臣聞く智者の千慮必ず一失あり愚者の千慮必ず一得あり故に曰く狂夫の言聖人之れを擇ぶ

と臣の計あに悉く拙ならん耶而かも其趙に在るや趙王取らず其齊に在るや齊王取らず故に趙を亡け齊を亡げ以て大王に歸す大王名海内に聞へ威天下に震ふ幸に捨てられずんは臣駑鈍と雖願くば愚忠を效さんと此に於て巧を拙に寓し情を矯め言を飾り以て項羽の意を迎ふ項羽以謂らく蘇張范蔡の徒なりと朝夕歡待復た秋毫も疑はず誠とに天の人國を亡ぼすは終に人力の如何んともする能はざるもの有る歟

第十　刀折れ、馬嘶く、何の兆ぞ耶

明霞愛す可し、眼を轉して而して輙ち空し、流水聽くに堪へたり、耳を過て而して戀ず、人能く明霞を以て美色を視れば則ち業障自ら輕し、人能く流水を以て絃歌を聽けば則ち性靈何ぞ害せん、形骸親に非ず、何ぞ況や形骸外の長物をや、大地も亦幻、何ぞ況や大地内の微塵をや、

大事、難事は擔當を見、逆境、順境は襟度を見、一喜一怒は涵養を見、群行群止は識見を見る、

事窮り勢蹙るの人は當に其初心を原ぬべし、功成り行滿つるの士は其末路を觀るを要す、

韓信兵を出して九里山に臨む、げだし李左車の計は、内外項羽の心を挑激し、必ず彭城を出でしめ、之れを九里山下の險坂に誘ひ、四面包圍して以て機先を制するに在り、一日、韓信山に上る、桃娘も亦從

ふ、山上に一個の敗祠あり、馬を祠前に立つれば、乾坤濶く、山河遠く、西風衣を吹いて、劍氣秋に鳴り、偏へに英雄の士をして意氣慨然たらしむ、桃娘因て韓信に代り、楚人を嘲るの詩を作り、以て板扉の上に題す、その詩

茫茫天地濶　亦堪唾手收　人心咸倍楚　知天興炎劉
指日向核下　立馬望沛樓　劍光何陸離　要斬項王頭

楚の細作就き寫し、歸りて項羽に示す、項羽怒髮天を指し、劍を握り、西を望み、罵りて曰く、此戰ひ、此賊を誅するに非ずんば、われ誓て此旗を班へさずと、令を三軍に傳へ、馬に秣はしむ、桓楚諫めて曰く、此れ或は韓信が大王の怒を激し、大王の兵少なきに乘じもつて一戰、勢を挫かんと欲するものなるべし、大王幸に輕擧する勿れ、臣惟ふ

に濠を深ふし、塹を高ふし、羽檄を飛して四方の兵を聚め、糧を會稽に取り、以て此を守り、干戈を交ゆるなくんば、敵兵自ら罷れん、然る後、逸を以て勞を待ち、長驅西に向はゞ、則ち韓信は計を施すに地なく、漢王は轅を廻すに暇なく、滎陽と成皐とは立食の間に取るべきのみと、諸將も亦交もゝ之れを諫む、項羽踟躕し、一たび宮に歸る、虞美人が曰く、妾聞く漢王百萬の衆を率ゐ、將に來り攻めんとすと、大王何の計か以て之れを拒がんと、項羽告ぐるに垣楚か切諫を以てす、虞美人が曰く、桓楚は國家の柱石、いふ所、尤も道理多し大王之れに從はゞ、社稷自ら萬安ならん、大王熟思せよと、項羽愈よ猶豫す、次日、群臣を會し、計を問ふ、李左車前に在り、進で曰く、漢の兵衆しと雖、而か遠來食少し、大王速かに兵を出して之れを城外百里の地に掃へ、不幸にして利少きも兩虎の鬪ふ所、その勢ひ猷も亦失ふところ多

からん、然る後ち退て此を守らば、漢軍疲倦、力拔く能はず、情屈し、勢見れ、終に自ら亡ぶるに到らん、然る後ち徐に大旆を進めば、千里風靡、滎陽取るべし、三秦復すべし、漢王の首も亦函して大王の麾下に致すべしと、項羽起舞して曰く、我心決せりと、即刻城を出で騎を並べて馳せ、玉橋の下を過ぐ、恠風乍ち起り、砂を捲き、石を飛ばし、乾坤冥冥、萬木怒號し、項羽か騎する所の烏騅、天を仰で悲鳴するもの三度び、牙旗も亦折れて兩段と爲り、地に仆れて回轉す、諸將士相顧み、て色を失ふ、桓楚項伯と心安んぜず、相議して曰く、騅悲鳴し、旗中斷す、此れ敗軍の兆なりと、虞子期をして馳せ歸りて虞美人に報ぜしむ、時に項羽すでに城西十里の地に在り、驛亭に息ふ、諸將切りに諫めて曰く、大王さきに彭城を出づるの時、旗折れ、馬嘶く、此れ古名將の兵を行るに忌む所願くは今師を班さん、項羽が曰く、殷紂は甲子

を以て亡び、周武は甲子を以て興る、而かも驗彼に在り、此になしといふは非なり、かつ我の出つるは、路人の偏ねく知る所、今にして遽然馬首を回さば、人人疑怖、却て禍源を貽さんと、復た馬に騎し、鞭を揚げて號令す、時に中使の東より來るもの有り、曰く、臣は虞后の所より來ると、函に一封を出す、項羽莞爾として笑て曰く、亦諫草歟と、披て之れを讀む、その文

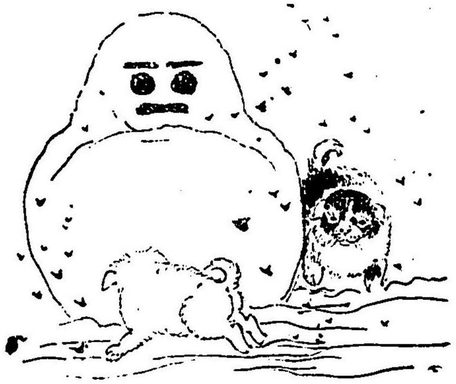
文王、后妃の諫を納れ、以て聖を成し、大禹、塗山の箴を讀み、以て憂を興す、古より帝王、未た嘗て諫に從はずして而して天下に君臨するもの有るを聞かず、臣妾は誠とに女子なり、固より遠大の見なし、但た聞く、漢將韓信尤も詭計を好むと、大王須く當に預め之れが防備をなすべし、桓楚等の言ふ所、言言味多し、實に大王の爲に孤忠を效すもの、大王宜く聽かざるべからず、況や今日の行、大

風旗を折り、烏騅頻りに嘶く、誠とに以て上天の示儆、大王須らく退省すべし、あに尋常の兆と謂ふて而して之れを忽にすべけんや耶

項王頗る躊躇の色あり、李左車以謂らく、われ苦辛して以て此に到る、功は今一簣のみと、因て急に促して曰く、漢兵百萬、糧食つゞかず、亦所謂る兵多ければ則ち將累ふ者に非す耶、臣が從士の言を聞くに、漢王すでに成皐に歸り、韓信も亦退かんと欲すと、大王今大王の麾下を縱つて、その倦弊に乘ぜば、千里電掃、誰れか復た大王を支へん、大王急に擊て失ふこと勿れと、項羽言を聞き臂を攘つて曰く、語に曰く、孟賁の孤疑は、庸夫の必至に如かずと、われ今此に至る、復た何をか猶豫せんと、大に呼つて而して馳す、前軍すでに五十里の外に在り、復た收むべからず、故に諸將も亦默して而して之れに從ふ、

次日、沛縣に到り、歆情を探るに、關塞山野に連り、人馬絡繹、糧食山の如く、漢王は牙營を棲鳳坡に設け、日夕酒を飲み、高歌酣舞、韓信は九里山に陣し、四門を開て、人の往來に便にし、馬を秣ひ、兵を練り、旗幟鮮明、皷角天に震ふ、項羽大に驚き、計を問はんと欲し、急に李左車を召す、在らず、曰く、昨夕從士と營外に出で、今に到りて猶ほ歸らずと、項羽切齒して曰く、われ豎士の術中に陷れりと、言未た終らざるに、白羽交も飛び、韓信の兵來り攻む、因て出で戰ひ、伏に陷り、大に敗れ、歸りて張中に入る、鎧袖斷へ、刀折れ、身箭を被る、蝟毛のごとく、鮮血面に滴る、虞美人が曰く、賤妾當日一死を惜み、李左車を伴ひ、終に大王をして挫敗を取らしむ、萬死の罪、逃るゝ所なしと、因て輾轉反側す、項羽が曰く、卿は唯た滿腹の赤心、わが爲めに士を薦むるのみ、何の罪する所ぞ、われひとり不德にして、敢て卿が諫を拒み、誤て敵の

術中に陷る、今にして之れを思へば徒らに忸怩を增すのみと、溫言に慰藉し、出でゝ殘兵を閲するに、失ふところ頗る多し、時に日まさに晡れ、戰後の江山、黯澹として、洸雲を鎖し、腥風人骨を吹き、旌旗色なく、俯仰すれば則ち目傷み、心痛む、



第十一　垓下の秋

青天白日處の節義は、暗室屋漏の中より培來し、旋乾轉坤的の經綸は、臨深履薄の處より操出す、

昨日の非は留むべからず、之れを留むれば則ち根燼また萌して、而して塵情終に理趣に累す、今日の是は執るべからず、之れを執れば則ち渣滓未だ化せずして、而して理趣反て轉して欲根となる、

能く熱地より冷を思へば、則ち一世凄涼を受けず、能く淡處より濃を求めば、則ち終身枯槁に落ちず

國士才人すでに不群の才を負へば、必ず不羈の行を負ふ、故に才やゝ衆を厭すれば、則ち忌心生じ、行やゝ時に違へば、則ち側目至る、死後の壁名、空しく墓中の骸骨を誉む、窮途の潦倒、誰れか宮外の娥眉を怜まん

沛の浚縣に一個要害の崇垓あり、絶巖長岡、高さ數十丈、樹暗く、路嶮に、聚邑及ひ堤、その側に在るを以て名けて垓下といふ也、楚の項羽

すでに敗れ、その兵を麾き、退て此に陣す、韓信從ふて之れを攻む、張良が曰く、項羽連敗失ふところ多しと雖、而かも宿將に桓楚あり、季布あり、鍾離味あり、猶ほ江東八千の子弟を率ひ、協力し、同心し、必死を知りて而して散せず、將軍今之れを攻め、終に之れを拔くも、必ず兵を損せんのみ、韓信が曰く、僕も亦之れを憂ふ、先生願くば胸中の計を惜む勿れ、張良が曰く、能く征人の涙を催し、能く孀婦の心を傷むるものは、其れ吹簫歟、われ少時下邳に遊ひ、洞簫を橋上の道士に學び、頗る造詣するところ有り、請ふ之れを吹かん、況や今や秋殘の時節に屬し、霜露初めて降り、木葉悉く脱し、人みな頭を回して故郷を憶ふ、もし夫れ糧つき、氣弛むの時に乘じ、千聲萬聲、風に臨んで餘韻を托せば、楚人の心中、必ず悲を生し、以て自ら離散するに至らん、此れ亦行ふべしと、韓信聞て大に欣ふ、時に項羽帳中に在り、感慨多

少、虞美人に謂て曰く、卿今日眼に漢軍の多きを閲し、如何んの心をか爲す、曰く、臣妾大王の威靈を賴み、諸將の力に倚り、秋毫も懼るゝ所なし、但だ大王、終日干戈の地に馳逐す、亦勞せずや、項羽笑て曰く、われむかし趙を救ひ、章邯と九戰し、糟糠にだも飽かざるもの一旬、嘗て疲るゝ所なし、今日の如きは眞に兒戲なるのみと、聞くもの皆な服す、因て酒を酌み、諸將に令し、八千の子弟を分ち、以て四門を守らしむ、將士復た涙を下さゞるなし、相語りて曰く、われ一度び軍に從ふてより、萬里奔走、連年暴露、沙草晨に牧し、河氷夜渡り、天長く、地濶く、家に歸るに路なし、今年また秋風の節に逢ひ、天冷かに、衣單に、殊に糧食のつくる、饑を醫す能はず、何を以てか新來の銳に嬰るを得んと、殘日西に沈み、林木風に咽び、落葉雨よりも急に、亂れて愁人の衣を打つ、霜月一輪、東南最高の峰に上れば、萬籟聲を收め、四隣寂

寥夜、氣凜凜として人の心骨に沁む、而かも張良すでに垓上の高岡に在り、楚の連營を俯し、風に臨んで而して洞簫を吹く、その響尤も悲痛、怨むが如く、訴ふるが如く、一曲は大に、一曲は小に、一聲は長に、一聲は短に、露の梧桐に迸るが如く、風の玎珍を送るが如く、鶴の九皐に唳くが如く、漏の銅壺に滴るが如く、餘韻裊裊、聞くもの爲めに涙を流し、魂を斷つ、桃娘も亦遙かに之れを聞き、韓信に謂て曰く、張先生の妙藝は簫史も亦及ばざる所なり、今淋漓悲壯の歌を作り、之れに和して而して之れを歌へば、楚人の心上さらに一段の愁を添へんと、因て筆を咬み、一篇の長歌を寫し、麾下の壯士數百人を擇び、垓提の上下に歌はしむ、その歌

九月深秋兮四野飛霜　天高水涸兮寒雁悲愴　最苦戍邊兮日夜疆場　披堅執銳兮骨立沙岡　離家十年兮父

母生別　妻子何堪兮獨宿閨房　故山腴田兮孰與之守
隣家酒熟兮誰與之嘗　白髮倚門兮望穿秋水
稚子啼飢兮泪斷肝腸　胡馬嘶風兮尙知戀土　人生客
久兮寧忘故鄉　一旦交兵兮蹈刃而死　骨肉爲泥兮衰
草濠梁　魂魄悠悠兮罔知所倚　壯志寥寥兮付之荒唐
當此永夜兮追思退省　急早散楚兮免死殊方
我歌豈誕兮天遣告爾　爾其知命兮勿謂渺茫　漢王有
德兮降卒不殺　哀告歸情兮放爾翺翔　勿守空營兮糧
道已絕　指日擒羽兮玉石俱傷　楚之聲散楚之卒
我能吹時協六律　我非胥兮品丹陽　我非雖兮歌燕
室　仙音徹時通九天　秋風起兮楚亡日　楚既亡
兮爾焉歸　時不待兮如風疾　歌兮歌兮三百字

字字句句有深意　勸爾莫作等閒見　入耳關心熟當記
隨處の歌聲蕭聲に和し、十分の悲痛千山色を變じ、萬壑沈沈水も亦
涸るゝかを疑ふ、楚兵八千、皆頭を回らして故山の雲を望み、魂消へ、
腸斷へ、涙下ること雨の如し、相告げて曰く、此れ或は上天此歌、此簫
に托して以て生を恤むの至意を示すもの歟、徒らに命を鋒鏑に隕
さんよりは、寧ろ漢軍に投じて、以て縲紲の辱を被るに如かずと、勿
勿脫歸し、紛紛相續く、而かも項羽と虞美人とは、正に酣眠の中に在
り、呼べども醒めず、鐘離味も亦亡げ、季布も亦亡げ、項伯も亦亡ぐ、茫
茫たる皇天、一何ぞ無情なる、終に西楚に祚せず、その社稷を截斷し、
その山河を破碎し、以て此に到る、亦哀痛のことに非ざらん耶

第十二　虞兮の歌

寸陰を惜むものは乃ち千古を凌轢するの志を有し、微才を憐むものは乃ち豪傑を馳驅するの心を有す

死死生生、情のために、多情の極、死せんと欲して得ず、生きんと欲して得ず、以て死すべくして而して生き、以て生くべくして而して死す

結纓整冠の態は、以て之れを焦頭爛額の時に施す勿れ、繩趨尺歩の規は、以て之れを救死扶傷の日に用ゆる勿れ

豪傑の士は尤も情に厚し、その艱難を憚らず、其生死を避けず、勇往し、猛進し、能く驚天動地の偉功を奏するものは、一に情の物に觸れて内に動き、外に現はるゝ所以にして、固より庸庸蚩蚩たる輩の夢想だもする所に非ず、情歟、情歟、情は才色に伴ふ、故に曰く、英雄は色を好むと、胡濬菴の黎倩に於ける、蘇子卿の胡婦に於ける、一時脂粉に呢むと雖、而かも其毅氣に、其大志に、嘗て分毫の增減なく、猶ほ鏡花の來れば則ち現れ、去れば則ち隱るゝがごとく然り、況や項羽のごときは、勇略絶倫、よく兵を用ゐ、大戰七十、小戰八十、天下を蹂躙して以て雄名を千秋の下に傳ふ、楚帳の中常に一個の嬋娟を携ふるも、亦何ぞその清範を玷けん耶、漢の五年冬、項羽垓下を守る、食すでにつき、人すでに疲れ、刀戟半ば折れて、旌旗も亦影なく、營中寂寥、今は唯だ駿馬騅、美人虞、及ひ將軍垣楚以下殘兵剩卒八百餘人を留むるのみ、而かも頭を回して韓信及び諸侯の軍を望めば、その兵凡そ一百二十萬、野には旌旗を樹て、川には組練を廻らし、之れを望むに渺として際なく、羽箭の飛ひ、金鼓の震ふ、湖海も亦掀翻し、山川も亦驚動するの概あり、項羽笑て曰く、猶ほ以て我武を試むべしと、夜三更、漢軍の四面に楚歌するを聞くに及び、乃ち大に驚て曰く、漢すで

に楚地を得るか、何ぞ楚人の多きやと、因て天を仰て長嗟するもの三度び、桓楚も亦色を失ふ、時に虞美人帳中に在り、走り出で之れを迎へて曰く、臣妾の大王に侍するもの茲に幾年、未だ嘗て涕涙の下るを見ず、今は乃ち悲號すること一に何を以て此に到れるや、項羽か曰く、われ今卿と永訣すべし、卿や多年われに從ひ、われ亦多年卿を携へ、千軍の間、萬馬の中、形影相隨ふて、而して終天の歡を了るを擬す、何ぞ圖らん、天の翻り、地の覆る、八千の子弟すでに亡んで、漢軍の合圍甚だ急に、風塵滿眼、卿か親しく覩る所のごとし、事此に到る、雙飛固より期すべからずと雖、而かも一片の恩愛、遽かに手を分つに忍びず、此を以て輾轉反側するのみと、言未だ終らざるに、美人の雙眼すでに一滴の涙あり、露の如く、丸の如く、之れを欠ふして汪汪雨よりも多く、項羽の膝に伏して曰く、臣妾大王と多年の恩愛を同

處にす、豈死生を同處にすべからざる歟、妾は唯だ死に從ふの妾ありて大王の清範を玷けんを恐ると雖、而かも情は則ち死せずんば透徹せざるのみ、鮫鱷の淵、虎狼の窟、妾も亦往かん、大王なほ之れを棄つるに忍ぶるかと、かつ語り、かつ咽ぶ、夜帳沈沈、殘燭紅顏を照して、顏色憔悴、鬢雲力なく、慘たり、悽たり、その風情頗る雨に傷むの殘花に似たるもの有り、項羽情に勝えず、強て杯を把り、聊か悶を遣り、慷慨し、悲歌し、因て自ら歌を作りて之れを歌ふ、その歌

力拔山兮氣蓋世　時不利兮騅不逝　騅不逝兮可奈何
虞兮虞兮奈若何

さらに數杯を連飲し、之れを美人に屬す、美人堪えず、亦歌を作りて之れに和す、その歌

漢兵已略地　四方楚歌聲　大王意氣盡　賤妾何

卿生

項羽と虞美人と之れを歌ふて而して泣き、泣て而して之れを歌ふ、歌ふこと數闋、燭花愈よ黯く、歌喉愈よ咽び、曲殆んと亂れ、調殆んと濕ふ、歌罷むに及ひ、項羽また涙數行下る、左右みな泣き、敢て能く仰き視るなし、桓楚帳外に在り、頻りに項羽を促して出でしむ、項羽因て涙を歛め、起て馬に騎し、美人に謂て曰く、卿それ命を全ふせよ、皇天もし此恩愛を恤まば、必ずや重ねて落花流水の歡を叙するの時あるべしと、美人蹌踉、歩を移すに力なく、涙丸紛紛として雙手に在り、鞍を攀ぢ、請ふて曰く、此圍もし脱すべくんば則ち必ず妾を伴へ、然らずんば則ち必ず妾を殺せ、必ず妾をして敵人の手に死せしむる勿れ、項羽が曰く、斯くのごときの亂軍、干戈地に滿ち、烽煙山を覆ふ、われも亦自ら能く脱するを期せず、卿が纖弱なる、一介の裙釵を

以て、如何んぞ能く之れに臨むを得ん、かつ卿は齡妙に、貌麗に、風塵の見るを罕にする所、劉邦必ず刃を加へずと、美人此語を聞くに及び、心腸寸斷ず、而かも項羽の心を決する甚だ固きを見、復た爭ふべからざるを知り、紿て曰く、大王願くば今大王の劍を借り、男裝して以て大王に江東に隨はんと、項羽之れを如何んともする能はず、因て劍を解て美人に授く、美人手を伸べ、拜して劍を受くれば、劍光一閃、すでに喉に在り、項羽大に駭き、慌忙馬を下り、坐して膝に枕せし む、鮮血の流るゝ紅泉のごとく、桃花の顏色半ば褪めて、鬢雲さらに重く、氣息奄奄、眉謝して曰く、大王妾の此に到るは命なり、但だ恨む、身は一個軟弱の女子に生れ、此國家覆亡の秋に方り、頭を馬前に碎き、骨を砂上に曝して、以て此耿耿の心を明にする能はず、徒らに道途に繫絆し、長く大王の累をなし、恩に違ひ、情に背く、復た何をか言

はんや、大王努力せよ、江東は猶ほ豪傑多し、往て之に倚らば、重て中原に馳逐するの時あらん、他年もし一念の枯骨に及ぶあらば、時に墓田を掃へ、妾も亦皇天罔極の恩を頼み、魂を返して以て大王の側に到るべし、恩愛こゝにつき、生死こゝに別る、噫亦命なるかと、語未た畢らざるに、氣結んで聲を出す能ず、遂に宛轉として而して絶ゆ、項羽因て大に哭し、屍を撫して曰く、われ微なる時、一たび美人を娶りてより、畢世の悃忱、端なく傾倒し、婉孌多年、兩心の相得る、復た此美人の如きもの有るか、われの萬死の地に出入し、堅を被り、鋭を執り、山河百戰、人を殺し、民を戮して、而して敢て辭せざる所以は、その望む所、江山に在らずして、唯た此美人と倶もに終天の歡を叙ふるに在り、如何んぞ色天の風雨、情海の波瀾、一朝に乖離し、事全く此に到る、恩愛の牽く所を以てせば、項を滅し、軀を捐つるも、亦復た奚ぞ

恤へん、今よりして而して後、われは終に當に情を以て死すべきのみと、十分の悲痛、復た起つに懶し、時に曉風金鼓の聲を送り、壁外大に騒く、桓楚諫めて曰く、事すでに逼る、大王宜しく天下を以て重しとすべしと、此に於て項羽始めて麾下の壯士を騎從し、即刻圍を突て南走す、路黑く、天低く、沈雲大野を覆ひ、腥風乾沙を捲き、亂餘の村莊、寂然として鷄犬聲なく、一路たゞ馬蹄の響を聞くのみ、

項羽疾く馳せて江淮を渡る、桓楚すでに陣亡して、軍に名將なく、勢頓に挫け、從騎の能く屬するもの一百餘人、漢の騎將灌嬰五千騎を以て之れを追ふ、陰陵に到り、迷ふて道を失ひ、一田父に問ふ、田父紹て曰く、左せよと、左すれば乃ち大澤の中に陷る、因て復た兵を引て而して東し、東城に到り、その殘卒を數ふるに、從ふもの纔かに二十有八騎のみ、林木鬱蒼、人煙稀少、殘日西に沈んで、山路太た惡く、左右

みな曰く、馬まさに玄黄、人も亦力折れ、殆んど寸進しがたし、大王幸に馬に飲せよと、相顧みて凄然、泣自ら下る、さらに行くこと數十歩、遙かに一點の火光を認め、かつ欣ひ、かつ走り、走りて門前に到れば、則ち一座大大の道院、院主出て迎へ、炊して以て麥飯を進む、將士飢疲する太甚し、猶ほ未だ箸を下すに及はず、金鼓すでに咫尺に震ひ、漢の追兵來り攻む、項羽心自ら終に脫し得ざるを測り、その騎に謂て曰く、われ兵を會稽に起して、より、今に到りて八年、身七十餘戰、當る所のものは破り、擊つ所のものは服し、未だ嘗て一敗を取らず、以て天下を覇有して、而して今卒に此に困むは、此れ天の我の亡ぼすもの、戰の罪には非ず、今日固より死を決す、願くは諸君のために快戰し、必ず三たび之れに勝たんと、因て大呼して馳せ下り、縱横に奮鬪し、手自ら一將軍を斬り、一都尉を斬り、雜卒數十百人を斬り、勢は猛

虎の群羊を驅るがごとく、漢の人馬みな驚て辟易し、血は滿山の樹に迸り、屍は大壑の岸を埋む、乃ちその騎に謂て曰く、何如んと、騎みな伏て曰く、大王の言のごとしと、項羽こゝに於て東のかた烏江を渡らんと欲す、烏江の亭長船を艤して項羽を待ち、之れに謂て曰く、江東は小なりと雖、而かも地方千里、衆なほ數十萬、亦王たるべし、願くは大王急に渡れ、今や獨り臣に船あるのみ、漢軍至るも以て渡すなけんと、項羽笑て曰く、天の我を亡す、われ何ぞ渡るを爲さん耶、かつ我れ當時江東の子弟八千人と江を渡りて西征し、今や復た一人の俱もに歸るなし、此心之れを愧づ、たとへ江東の父兄われを憐み、われを王とするも、我獨り何の面目ありて之れを見んと、亭長凄然として泣く、項羽その有心の人なるを知り、駿馬騅を出して之に授けて曰く、われ公の長者なるを知る、われ此馬に騎すること八年、奔

馳千里、當るところ一敵なし、今之れを殺すに忍びず、以て公に贈る也と、亭長之れを受け、正さに拜謝の間に在り、騅項羽を望んで三たび嘶き、蹶然轡を脱し、躍りて江に趣く、項羽愴然、天を仰ぎ、歎じて曰く、虞美人死し、桓楚死し、騅も亦死す、われ以て死すべしと、因て、令を下し、騎は皆な馬を下り、短兵を持して接戰せしむ、獨り羽が殺すところ數百騎、身も亦十餘創を被り、流血潮のごとく、顧みて漢の騎將呂馬童に謂て曰く、汝はわが故人に非ずや、われ聞く、漢わが頭を千金と邑萬戸に購ふと、われ今汝に德をなさんと、遂に自ら刎ぬ、時に年三十有一、實に大漢の五年巳亥十二月某日のことに屬す、之れを顧ふに、初め項羽の起るや、先づ得る所のものは忠臣桓楚也、駿馬騅也、美人虞也、烽煙の中、干戈の下、之れを携へ、之れを伴ふこと實に八年、八年にして亡ひ亡ぶるや、桓楚と、騅と、虞美人と同じく亡ぶ、此れ

何の宿因ありて然るか、然る後、乾坤寂然、覇圖全くやみ、天下の江山すべて漢家の有に歸す、亦悲壯のことに非ざらん耶

第十三　虞美人草

幽情化して而して石立ち、怨風結で而して塚青し、千古空閨の感、頓に薄倖をして魂を驚かしむ、

黄葉風なくして自ら舞ひ、秋雲雨らずして長へに陰る、天もし情あらば天も亦老ひん、搖搖たる幽恨禁しがたく、惆悵す、舊人夢のごとく、覺め來りて追尋するに處なし

血は三年にして而して碧を藏し、魂は一變して而して紅を帶ぶ

生死の關を打透すれば、生來また罷む、死來また罷む、名利の場を參破すれば、得了また好し、失了また好し、

快刀割斷すれば、恩讐は一夢のみ、生前の反眼により、墳墓を發き、枯骨に鞭ち、以て自ら快とするもの、彼れ終に何の心ぞ、余こゝに於て、か始めて漢の高祖皇帝が雅量の宏恢なるを欽ふ、烏江の一戰、項羽の首、函して漢に到る、漢の高祖皇帝之れを檢するに、面目躍然、なほ

生けるの年のごとし、因て泣て曰く、我むかし大王と兄弟の約を結ひ、兵を聯ねて秦關を叩く、何ぞ料らん、爾來東西に對峙し、鹿を中原に爭ひ、遂に斯くのごとくにして而して相見んとは、殊に我父と我妻の大王の陣に陷る、此反眼を以て、三年の久しき、秋毫も辱むる所なし、此れ古の名將軍も亦遠く及ばさる所なりと、因て廟を烏江に建て有司に命して之れを祀らしむ、而かも項羽の墓は今に猶ほ穀城の西三里の地に在り、雨打ち、苔爛れ、斷碣蕭條、行人の心目を傷むるもの茲に二千一百五十年

初め項羽の垓下を遁るゝや、韓信代り陣す、桃娘も亦從ふ、虞美人の屍を帳下に得るに及び、地に倒れて痛哭し、之れを撫して曰く、美人遂に殉するか、われ仇を報ひ良を求むるに急に、千里相乖く、靈や知るあらば幸に之れを恕せよ、烽煙の眼に滿つる、われ必ず美人の此

に到るを知り、心ひとり惱むと雖、而かも美人が節を持するの固き此に到らずんば終に透徹せざるもの有り、今にして之れを思へば、徒らに忸怩を增すのみと、十分の悲痛、涙に和して鬢髮を修め、頸血を拭ふ、韓信も亦頗る情懷を傷め、桃娘をして滿地の珠翠を收め、棺歛して而して之れを濠洲定遠縣の東六十里の地に葬らしむ、越へて幾日、滿眼の風雪、一花、末だ春ならざるの時に方り、虞姫の墓上に一根の青草を生じ、以て漢家の乾坤に獨立す、人みな之を異とし、名けて虞美人草といふ、げだし紅魂の倚る所か、將た亦碧血の化する所ろ歟

虞美人　終

明治三十四年二月四日印刷
明治三十四年二月六日發行

著作權所有

著作者　宮崎來城
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區竪大工町五番地
印刷者　戸上義章　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

正價二十五錢

發兌元　東京市神田區竪大工町五番地　大學館

1-337

81
1
559

Ⓜ

007561-000-6

81-559

虞美人

宮城　来城／著

M34
ACL-0014